

[ワークショップ]

方法としてのインタビュー

※本稿は、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻が主催し、2020年12月14日にオンライン形式で行われたワークショップ「方法としてのインタビュー」の録音を文字起こししたうえで、読み物として分かりやすいように登壇者が加筆・修正を加えたものである。当日に発言しなかったものの補足した方が良いと思われる関連情報などは、本人が注釈に追記した。

蘭 本日はたくさんの方に参加していただきまして、ありがとうございます。このワークショップは私が一緒に共同研究をしている若手に登壇をお願いし、企画しました¹⁾。李洪章さんは社会学、福本拓さんは地理学、もう一人は歴史学の人見佐知子さんに参加いただき、本ワークショップの中核＝第二部を構成しました。第一部は私の「方法としてのインタビュー」で本ワークショップの導入をし、第二部はこの御三人に「実践としてのインタビュー」を自分の研究実践を中心に話をさせていただきます。そして、第三部は総合討論「可能性としてのインタビュー」を参加者の方々とともに論じます。まず、参加者を代表して上智大学国際関係論専攻OGの伊吹唯さんに、報告者4人に質問を投げかけていただき、我々がリプライし、そ

うちはフロアからのご質問を受けたいと思っています。

では、まず挨拶をさせていただきます。私は上智大学の蘭（あらぎ）と申します。次に李洪章さん一言どうぞ。

李 神戸学院大学の李です。よろしくお願いします。

人見 近畿大学の人見です。よろしくお願いします。

福本 南山大学の福本です。よろしくお願いします。

伊吹 熊本保健科学大学の伊吹です。よろしくお願いします。

蘭 以上の5人で、今回のワークショップを始めたいと思います。その前に、質問の仕方に関して福本さんから。

福本 質問はグーグルフォームのリンクに飛んで記入いただきましたら、リプライをさせていただきます。グーグルフォームのリンクはチャットでご案内します。

蘭 以上、本日のワークショップ進行・質問に関しての説明です、皆様、質疑にもよろしくご参加のほどお願いします。それでは、第一部「方法としてのインタビュー」に関する私の報告に入ります。

第一部「方法としてのインタビュー」

蘭 信三（上智大学）

1. はじめに

本ワークショップのねらいを簡潔にのべました

1) そもそも、このワークショップの始まりは、私の退職にあたり、インタビュー論について経験豊富な私に最後にインタビューについて話をしてほしいという大学院からの依頼に始まりました。ただ、私たちの専攻関係だけでなく、日本オーラル・ヒストリー学会の会員で長く理事や会長などとして学会にお世話になっていましたし、日本移民学会にも長いことお世話になっていましたので、上智大学国際関係論専攻だけでなく、もっとひろく貢献したいと思いました。そのため、私のインタビュー実践だけでなく、私よりもっと本格的にインタビュー実践をしている若手の李洪章さんを中心に、多様な専門の方々に登壇していただき、その実践を披露するという企画と

が²⁾、ついで「方法としてのインタビュー」を通しての自己紹介を行います。また、「技法としてのインタビュー」ですが、どうやってインタビューを始めるとかについて簡潔に紹介します。それに、90年代を

しました。その際に、インタビュー実践を学際的に考えてみたいと思いました。たとえば、社会学はインタビューと相性がいいのですが、歴史学でもインタビューはかなり行われていますが、社会学ほどインタビューと相性がよくはなく、その扱いが違ってきます。さらに地理学にとっては、インタビューを主要な研究方法として利用するのは難しいのです。このようなインタビューとの向き合い方が異なる専門の若手に、それぞれの立場からインタビューにどう向き合ってきたのかについて話していただくことで、幅広い視点からインタビューを論じていくのではないかと考え、このような企画としました。

中心にインタビューの方法論、認識論について大きな転換がありましたので、そのことを説明し、最後にまとめを行います。

さて、インタビュー論を企画しながら、私はインタビューのみで論文を書いたことはあまり多くはないんですね³⁾。しかし、矛盾していますが、「方法としてのインタビュー」(／フィールドワーク)は私に研究者としての扉を開いてくれた、と思っています。その意味で私にとって、「インタビューは魔法の扉」だったのです。これがなかったら、たぶん私は修士で大学院をおえて、行政に入っていたか、企業に入っていたらと思う。インタビューという方法に出会ったことで、私は研究者として生き延びることができたのではないかと、思っております。

2. 私のインタビュー実践—失敗と成功と

私は話好きで、人間が大好きです。がしかし、じ

つはインタビューは苦手(というか得意ではない)と思います。インタビューという方法が私を研究者にさせてくれたといいましたが、インタビュー自体はあまり得意ではないだろうな、と自分で思います⁴⁾。

なぜかという、自己分析すると、「構え」が強すぎるのです。構えとは何か、それは先入観か思い込み(よく言えば、明確でないかたちでの仮説)でしょうか。それに、私は柔道の有段者で、学生時代はけっこう強かったんですが、そのせいか、(対面すると自然と)威圧的になるようですね(あるいは目力で相手が威圧されるようです)。さらに、相手の話をとる。インタビューにいつて話をとっちゃう。(抑制はしているのですが、インタビューを順調に進めようと強迫的に相手の話に同調し、同様な経験を話すのですが、時々度が過ぎるのですね。)しかも、話を聞きながら、その場で物語化してしまう。聞きながら物語化するなんて、早とちりもいいところですね。これらはすべて、もうインタビュアー

2)「本ワークショップのねらい」で言うべき点を3つほど言い忘れていました。1)報告レジュメには、インタビューから論文化までの勘所を掴むことを目指していること、インタビューはだれでも出来るけどじつは難しいこと、ここではインタビューはどうすればいいというレシピを示すわけではないこと、です。また、2)インタビュー対象が一般的なものか特殊なものかで対応が異なること。質問を準備してそれに沿って行う構造化されたものか、大きな質問は決まっていますが語り手の話に応じて自在に質問を行う半構造化インタビューまで幅があること。インタビュー相手とのラポールの取り方とオーバー・ラポールの問題。インタビュー相手を探す雪だるま法等々、について話す予定でしたが割愛しています。最後に3)インタビュー／聞きとり、オーラルヒストリー／口述史／聞き書き、生活史／ライフヒストリー／ライフストーリー、等々それぞれに固有の歴史があり、こだわった使い方がありますが、ここでは広く含めて、論じていきます。

なお、最近手にしたインタビュー作品でもっとも感動したのは、江川紹子さんが大沼保昭さんにインタビューした、大沼保昭著・聞き手 江川紹子『歴史認識』とは何か 対立の構図を超えて』(中公新書、2015年)です。ここまで見事に答えた回答者を知りませんし、この回答を引き出すいい質問を繰り返した江川紹子さんはさすがだと思いました。大沼さんの語りは基本的に誠実で、かつ圧倒的な情報量を明快に整理してわかりやすく説明しており、見事のひとことです。同時に、それを引き出したのは「聞き手」としての江川さんの存在です、二人の見事な共同作品だと言えましょう。それを江川紹子編ではなく、「大沼保昭著 聞き手 江川紹子」と表記したセンスには、圧倒的な語りをする大沼保昭さんへの敬意とともに、編集者としての江川紹子の矜持を見た思いです。

3)その学説や方法論、そして聞きとりプロジェクトの導入に関しては多くありますが、自分のインタビューを

中心に書いたものは数少ないです。たとえば、蘭信三『満州移民』の歴史社会学』(行路社、1994年)の序章、第7章、です。他方で、方法論や聞きとりプロジェクトについては、たとえば以下のようです。蘭信三『満州移民研究における社会学的方法の可能性』『社会情報』第9巻2号、2000年。同『はじめに』満蒙開拓を語りつぐ会編『下伊那のなかの満洲 報告集1』飯田市地域史研究事業準備室、2003年。同『解説 中国残留邦人の聞き書きを行う意義』中国帰国者支援・交流センター編『二つの国の狭間で—中国残留邦人聞き書き集1』同センター、2003年。同『地域でオーラルヒストリーを聴くこと』『人環フォーラム』No.14、2004年。同『中国「残留」日本人の記憶の語り—語りの変化と「語り」の磁場』をめぐって』山本有造編『満洲 記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年。同『あとがき—聞き書きプロジェクトを終るにあたって』中国帰国者支援・交流センター編『二つの国の狭間で—中国残留邦人聞き書き集5』同センター、2008年。同『オーラル・ヒストリー実践と歴史との〈和解〉』『日本オーラル・ヒストリー研究』第5号、2009年。同『中国残留日本人との邂逅』『勉誠通信』13号、2009年。同『満洲引揚者のライフヒストリー研究の可能性—歴史実践としての「下伊那のなかの満洲」』福岡良明ほか編『戦争社会学の構想』勉誠出版、2013年。同『オーラルヒストリーの展開と課題—歴史学と社会学の狭間から』『日本の歴史第21巻・史料論(テーマ巻2)』岩波書店、2015年。同『ライフストーリーによる社会学の歴史研究の可能性』(シンポジウム講演録『歴史と記憶とオーラル・ヒストリー』)『近代日本研究』第33巻、2016年。同『戦時性暴力を聞き取るということ—『黄土村の性暴力』を手がかりに』上野・蘭・平井編『戦時性暴力の比較史へ向けて』岩波書店、2018年。蘭信三・蘭由岐子『書評 大門正克『語る歴史、聞く歴史 オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店、2017年』『歴史評論』No.833、2019年、等々。

として最悪です。そのためか、インタビューによる（ライフストーリー）論文を上手く書けなかったな、と思ひ返します。しかし、矛盾していますが、インタビューが私を研究者にしてくれました。

(1) なぜインタビューを失敗したか

インタビューの失敗例はたくさんありますので、以下、いくつか紹介します。

枠にはめる 私は、（時代に恵まれ）運良く、すぐに大学の教師になって、博士課程2年中退で熊本大学に就職しました。そこで、その当時熊本に移り住んできた姜信子さんという在日コリアンの有名な若い作家⁵⁾と出会い、彼女にインタビューをしたことがありました。ですが、ガチガチのカテゴリー（＝枠）にはまったような質問をし、「在日」という「枠」に姜さんを押し込めようとして、姜さんからは話をはぐらかされて、全然、話が進まなくて、お互いに「ウーン」（困ったな）という感じでした。30年くらいたってから、たまたま（彼女の著作を祝う会）に偶然誘われて熊本で再会し、「昔、下手なインタビューをしましたよね、それで姜さんは私に悪い印象あるのかとずっと思っていました」というと、「そんな記憶、ないよ、悪い印象ないよ！」と言ってくれました（彼女の配慮でしょうが、ほんと、安堵しました！）。

このインタビューがうまくいかなかったというの

は、なぜかという、相手の話を「在日」というカテゴリーでもって（枠にはめて）とらえようとしてしまった⁶⁾。半端な知識や先入観に縛られ、固定的なインタビューにしてしまった、ということでしょうか。（この頃はまだ経験が浅かったので仕方なかったでしょうが、これは私のようなタイプには要注意のことでしょうか。学生を指導していても時々こういうタイプに出会います。その時は、自分の失敗談も交えて、じっくりと話し合います。）

価値判断をする 二つ目の失敗は「満洲」からの引揚者へのインタビューです。2002年の春、当時は京大の教員になっていましたが、長野県飯田市をはじめ訪れました。飯田市や下伊那郡は、「満洲」引揚者（以下括弧をとる）が日本一といってもいいぐらいたくさん住む地域でして、多くの人たちが（家族・親族か、あるいは地域の関係者が）満洲体験を持っているところでした。そこで、「満蒙開拓を語りつぐ会」という聞き取りのプロジェクトを、地元の人たちとともに立ち上げたのです⁷⁾。

聞き取りのプロジェクトを立ち上げていく際、最初に主要な人たちにインタビューをしていきました。その時のインタビューを振り返ってみると、私は批判的な視線で相手を見ていました。ある方は、「私たちは満洲から引揚げてきた時、大変悲惨な目にありました」という「被害の語り」をしました。その被害の語りを聞きながら、（被害の語りばっか

4) もちろん、普通の人と較べるとインタビューは「上手」だと思います。フィールドワークの授業の技法編で毎年受講生の目の前で模擬インタビューを5～10分程行います。すると、クラスの皆さんの前ですが、インタビュー（語り手）はすっと自分の話にはいっていき、時には怖いほど濃い内容の話をしてくれます。「聞き手」を前に語りたいことが弾けるのでしょうか、「それ以上話してはいけない」と私が止めにはいるほど、自分の個人的な語りに入っていきます。その学生との間に信頼関係がありますし、私が学生の語りに慣れていますし、話したい人にお願ひするので、お互いにずっと本題に入っていけるからでしょうか。これを見て、学生は驚きます。たった5～10分程度のインタビューでここまで深い話が聞けるのかと。これは場数をこなしてきたことによる経験知と、教師と学生という関係性によるものと、学生の「語りたいこと」を引きだす姿勢に徹しているからかと思われます。しかし、本当には得意ではなく、なかなか互いが満足するインタビューは出来ません。その反面、あとで述べますように、インタビューや聞きとりのプロジェクトを進めるのは得意だ、と思います、たぶん。

5) 姜信子さんは、『ごく普通の在日韓国人』で1986年第2回ノンフィクション朝日ジャーナル賞を受賞したひとで、この作品で在日コリアン三世の新しい生き方を見事に描写した人として注目されました。私は当時、満洲引揚者や残留婦人との出会いから、「日本帝国」崩壊後の

東アジアにおいてポストコロニアルな状況を生きる人々への関心を持ち始めた頃でしたので、共通の友人を介して紹介してもらいました。『ごく普通の在日韓国人』は1986年に朝日新聞社から、90年に朝日文庫から刊行され、この30年間読み継がれてきたノンフィクションです。

6) 姜さんは、そういう古い「在日」という枠/ステレオタイプから、自分自身も、日本社会の見方自体も変えたかったのです。そして私はそれを読んで感動しながらも、なお枠にとらわれて質問していったのです。相手の気持ちに気づかず、自分の枠にこだわった堅いインタビューだったと思います。それに、この頃はまだまだ若くて強くてへんに自信があって、思い込みも強く、しかも大学の教師になったばかりで、半端なプライドで知ったかぶりをして、いまから思うと、とても嫌な奴だったと思います。

7) 満蒙開拓を語りつぐ会は、長野県飯田市を中心に一般の人たちが参加して、満洲からの引揚者の語りを聞き取る30名ほどの市民グループで、2002年に発足しました。この会は、毎年聞きとった聞き取りを『下伊那のなかの満洲』という聞き書き集にまとめて、81名の聞き取りを全10巻にして刊行した剛腕の会です。戦後日本の市民による聞きとり実践活動のなかでもっとも目覚ましい活動をしたものの一つで、2012年に長野県の県民賞ともいえる第19回『信毎賞』を受賞しています。

りだったので、)「自分が植民地支配の片棒を担ったという意識はないんですか?」と、私がふっと言っちゃたんですね。そうすると相手はしゃべれなくなる。この時期、私といっしょにインタビューに行っていた、私が指導していた大学院生も、今はある新聞社の記者になっていますが、同じような失敗をしました。彼女も批判的な質問をしたり、批判的なまなざしで見たりする。その結果、二人ともなかなか満洲引揚者の方にうまく話をしてもらえない⁸⁾。そりゃそうですね、批判されたら、口をつぐむしかないですよね。インタビュアーとしての私は最悪でしたね。

飯田下伊那で聞きとりプロジェクトを立ち上げ、導入のセミナーではインタビューの技法と論理を紹介する際に、「こういうふうにするんですよ」(満洲引揚体験者を植民地的支配に加担した人たちという批判的なまなざしや、引揚で言葉にできないような悲劇を経験したかわいそうな人たちというステレオタイプで理解しないで、相手の話をじっくりと聞いて、出来るだけ語り手の具体的な体験と想いを受け取ってください、)といった技術的な指導を私がしていました⁹⁾。しかし、このようなインタビュー指導をしながらも、自分では話がうまく聞けない。聞いてもなかなか進まない。相手をカテゴリーでとらえてしまう、さらに価値判断もしてしまう。しかも、「聞

きたい」ことしか聞かない。本当に最悪でしたね。

つい先日、テレビを見ていて、「小腹すいてませんか?」という番組でしたが、ある芸能人が出ていて、彼女がさらっといった言葉に合点しました、「ああ、そうだったんだ」と。彼女は「芸能人としての私ではなく、23歳の女の子の私として接してくれる、普通に話せる(地元の)友だちと話すのが好きなんですよ」とさらっといった。「あ、これなんだよね」と思いました。素顔の、ほんとの自分を見てくれる人、ほんとに「話したいこと」を聞いてくれる人、そういう聞き手になれなかった。それが私のインタビュアーとしての失敗でした。

(2) インタビューが切り開いた新領域

ただ、「インタビューによって研究者として生き残った」といいましたように、たくさんインタビューをしていますから、やはりいくつかは成功したものもありました(、と思っています)。

満洲引揚者との出会い それは忘れもしない、1984年8月10日のことです。熊本県菊池郡というところで、満洲から引揚げてきた工藤さんという夫婦に出会いました¹⁰⁾。(それまでに満蒙開拓団関連の人たち数名にインタビューをし、資料もある程度読んでおり、)その頃には満洲移民や開拓団について、ある程度は予備知識があったんですが、話を聞きに

8) 中国残留婦人を描き出した有名なドキュメンタリー作品『忘れられた女たち』(NHK、1989年)というのがありますが、その中心的登場人物であった中島多鶴さんを長野県のご自宅まで訪ね、残留婦人への支援についてインタビューしました。その折に、その大学院生は、でもあなたは、みんなを捨てて引揚げてきたんですよねといった批判的な質問をしました。中島さんは、一瞬たじろぎ、それ以降は沈黙し、何も言えなくなりました。ドキュメンタリーのなかの中島さんの語りを振り返ると、じつはこの質問は彼女のまさに苦しい心中に踏み込んだものだったかと思われまふ。その沈黙の意味は深く、私たちは深く反省しました。

9) 満蒙開拓を語りつぐ会編『下伊那のなかの満洲 報告集1』(飯田市地域史研究事業準備室、2003年)を参照ください。

10) 拙著(1994年)の序章を参照ください。なお、このインタビューは、指導教官だった京都大学の中久郎先生に勧められ、半信半疑で始めたものでした。中先生は、遠く九州に赴任した私に、彼が主催する京大の研究会のメンバーとして参加できるようなテーマ「満蒙開拓団研究」を提案してくれたのです。しかし、最初は渋々でした。というか、このテーマに関して私にはまったく研究蓄積がなく、どう展開していいか皆目見当がつかなかったのです。手探りで、熊本で「取材」を始めました。その結果、熊本は有数な海外移民送出県で、満洲へも多くの農業移民を送出しており、満洲引揚者などの関係者を見つけるのに困難はありませんでした。当時の星子敏雄熊本市長

も東京帝大卒の満洲国総務庁の若手エリート官僚だった人でした。ですので、テーマ的には難しかったのですが、関係者にはすぐコンタクトできました。この夫婦に出会う前にも、満洲開拓団関連の人たちに数名会い、インタビューを経験していました。満洲開拓団関連の満拓公社に若くして勤め、引揚後は熊本県庁に勤務していた方は「満洲に行ったのは理想に夢を託したこと、五族協和の理念に憧れてのことであり、決して侵略ではなかった」、と言いました。また、青少年義勇軍の指導員をしており、シベリア抑留後帰還して教師に復職した方は、ソ連の社会主義の建前性とロシア人の鷹揚さなどを漫談のように語ってくれ、その話は魅力的すぎて、互いに警戒し合っていました。その後、私も継続的にインタビューを重ねていました。最後に、熊本随一の、篤農家を中心とした満洲開拓団関係者で、戦後も「留用」されて地元の農業の指導にあたったという開拓団の中心人物に会い、満洲開拓団関係者はほぼ満洲から「追放」され、命からがら引揚げてきたという「常識」を覆されるような、戦後も地域の農業指導を請われ、新中国のために働いてきた、等々という話を聞かされました。それらはすべて非常に新鮮で興味深いインタビューでして、それぞれの個性がよくわかるような奥行き深い話でした。しかし、私の満洲認識を根底から変えるようなものではありませんでした。ただ、それぞれが多様な体験を抱えながら、戦後社会でどのように生きるかを模索しながらの人生であったことがよくわかったことで、満洲引揚者の〈満洲体験〉と同様に〈満洲後〉の生き方(戦後体験)に関心が強まりました。

伺ったら、その夫婦の話に引き込まれて、4時間くらい話に聞き入りました。(その語られる話には)とにかくびっくりしました。「あなたは植民地支配の片棒を担いだんでしょう?」とか、そういう批判的言葉は(私からは)まったく出てこない。(工藤さんの話は、冷静でかつ詳細でした。なぜ満洲に渡ったのか、満洲ではどのような生活だったのか、成功や失敗、敗戦後の逃避行の話、避難民収容所でのエピソード、引揚げ後の相互扶助、70年代以降の開拓団の集まり等々、渡満から現在までの約半世紀のライフストーリーを一通り話してくれました。ここでの聞き取りが以降のモデルになったほどです。)それは圧倒的な話でした。満洲に渡って戦後引揚げてきた人に対する私の認識が、そこで大きく変わっていったのです。その夫婦は私の両親と同じくらいの年齢で、一期一会、一回きりのインタビューでしたが、そのご夫婦のインタビューは今でも覚えてますし、そしてそのときから、このテーマをずっと考え続けていったのです。

中国残留婦人との出会い さらに1989年7月半ば、これもまた熊本でその年の5月に知り合った「中国残留婦人」(以下括弧をとる)、私の本のなかでは木曾幸子さんという名前で出ています。木曾さんと出会った時、木曾さんの講演を聞いて、なんか惹きつけられました。その時木曾さんは支援団体の招待で「一時帰国」しており、故郷の長野県に帰ってきていました。(そして支援団体の招きで5月に熊本に招待されており、たまたまその会の中心メンバーの豊田さんに誘われて、私はその会に参加していました。熊本での講演会の後に豊田さん宅での懇親会で少し話し、もっと「自然な話」、周りの人たちへ配慮(同調)したような語りではなく、彼女の心からの語りを聞きたいと思いました。)そこで、長野の木曾の彼女のところに電話して、押しかけ、「話を聞かせてください」と一泊二日で2日間に渡って16時間くらい聞かせてもらいました。戦後の中国に残留していた時の話ですが、お涙頂戴の話なのかなと思ったんですが、そうではなく、淡々と自分がどういう経緯で満洲に渡り、残留したのか、(日本人がみな帰った後の)戦後の中国で「日本人として」ど

うやって生きてきたのか、という話をするのですね。とにかく驚愕し、感動しました。僕の浅はかな歴史的知識や想像力はすっ飛んでいってしまった。ここでも、中国残留婦人に関する認識が大きく変わっていきました。(彼女の話聞き、)一緒に涙を流しながら、「こんな人生が世界にあるとは、それを生き抜くとは、これはいったいなんなんだ!」と思った、驚愕のインタビューでした。(こんな人生がありうるなんて、そしてそれはなぜなんだ、という驚きと説明できない「怒り」、そしてそれを社会にきちんと伝えたいという想い、)これが、私を研究者として生き残らせたのだと思ってます¹¹⁾。

「話したいこと」と「聞きたいこと」のあいだで私のインタビューはなかなか成功しない、だいたいいつも「失敗」するんです。がしかし、この二つだけは「成功」しましたね。なぜかという、タイミングが合ったことと、残留婦人にとって私は息子みたいな年齢なんですね。満洲から引揚げてきた夫婦にとっても私は息子や娘よりちょっと若いくらい。インタビューに行ったタイミングがじつによかったし¹²⁾、年恰好も含めて、相性がよかった。そのためか、私の「聞きたいこと」と相手の「話したいこと」が、その時はピタッと合って、私の「聞きたい」という気持ちが先走らなかった。むしろ向こうの「話したい」という気持ちのほうが私を圧倒してきて、私の「聞きたいこと」を覆い尽くしていく。その話のなかにすべて(私の聞きたいこと)がある、という感じでした。さきの熊本での工藤夫妻と、長野での木曾さんとのインタビューで、私は二組の方の「語りの力」にうたれ、そのインタビューを何とか生かしたい、と強く感じました。繰り返しますが、この想いが私の現在までの研究につながった、と思っています。

もう一つ「成功」したインタビューがありました。が、時間の制約で割愛します(それは2017年4月の石田米子さんへのインタビューでしたが、これは参考文献の「戦時性暴力被害を聞き取るということ」上野他編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』に詳述しています)¹³⁾。

転機としてのインタビュー 私は、大学院生の頃(1970年代)は村落研究をやっていました(最初の

11) この点については、拙著(1994)の第7章に詳述しています。また、同(2009)「中国残留日本人との邂逅」や、同(2013)「満洲引揚げ者のライフヒストリー研究の可能性—歴史実践としての『下伊那のなかの満洲』」にも詳述していますので、ご参照ください。

12) 工藤さんの場合は8月9日のソ連の満洲侵攻の翌日で、8月9日は「満洲殉難の日」として熊本では毎年慰霊祭が開催されますが、ちょうどその翌日でした。また、

木曾さんは一時帰国中で、各地の支援団体の招待で講演に出かけており、話をうまく整理していたし、気持ちが満たされていたし、日本社会に伝えなければという想いが強かった時でした。

13) 蘭信三(2018)では、父親の戦場体験も含めて、石田米子さんとのインタビューの経緯をかなり詳しく書いています。ご参照ください。

熊本大学への就職は村落社会学者としての地域社会学講座への就職でした。しかし、1984年に満洲引揚者の工藤夫妻に出会って以来ずっと「満洲引揚者」の研究を続け、89年に中国残留婦人の木曾さんに出会ったことで「帝国と人の移動」研究に展開していったのです。数少ないこの二つの「成功」したインタビューが、私の心のなかにずっと生き続け、私に繰り返し語りかけてくる。そしてそれが研究の転機となり、新しい研究のエネルギーになってきた。この二つのインタビューが、私を研究者として生き残らせ、(ポストコロニアルをテーマとする)一人前の研究者に育ててくれたのではないか、と思っています。

3. 「技法」としてのインタビュー

さて、「自分語り」はこれくらいにして、インタビューをどうやってすすめていくかについて話します。このワークショップに参加されたメンバーを見

14) インタビューは、あるテーマやトピックについて相手を持っている情報や体験を、短時間で要領よく聞き取る方法というのが一般的イメージでしょうか。これは取材やヒヤリングと呼ばれるものに近いでしょう。これに対して、ここではもっと長い時間をかけて、個人の人生における体験や経験というもの(ライフストーリーやライフストーリーと呼ばれる)を聞き取る方法を主にイメージして解説しています。後者の場合、個人がどのような体験をしたか、そしてそれをどのように思い返しているのかを聞くことが主な目的となりますが、そこにおいてももっとも重要な点は「語り手のリアリティ」を聞き取ることでしょうか。個人にとってのリアリティとは主観的なもので、外から見た客観性では判断できません。そして、リアリティがもっともよく現われるのが「語りたいこと」「聞いてほしいこと」でしょうか。

なお、インタビューの技法については、桜井厚『インタビューの社会学』(2002年)と『アクティヴ・インタビュー』の二つが、認識論も含めて本格版です。政治学の御厨貴『公人のオーラル・ヒストリー』(中央新書、2002年)や伊藤隆のインタビュー論はインタビューのブログが書いたものとして、とても参考になります。最近では、大門正克『語る歴史、聞く歴史—オーラル・ヒストリーの現場から』(岩波新書、2017年)、御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何ができるか—作り方から使いまで』(岩波書店、2019年)が参照になりますし、かつ読み応えがあります。大門さんはイギリスの「下からの歴史」の系譜にあり、戦後日本社会の民衆の歴史を掘り起こしてきた生活綴り方運動や労働者や農民や女性たちの聞き書きやオーラルヒストリーを重視します。他方で、御厨さんたちは政治家や高級官僚など社会をリードしてきたいわば「公人」のオーラルヒストリーを重視します。それは、どちらが正しいかの問題ではありません。それぞれの研究領域には固有の問題関心があり、アプローチの仕方がありますし、オーラルヒストリーのやり方も違いがあるでしょう。蘭(2015)で詳述しています。大学

てみますと、大学院生や若手ですが、ベテランの先生もおられます(そのような方々を前に恐縮ですが、)5点ほど簡潔にその「技法」について話します¹⁴⁾。

(1) 調査倫理

まず、どうやってインタビューを始めるか。私たちの頃は調査をする時、調査の倫理委員会とかなくて、話してくれる人がいたらインタビューにいくという感じでした。その頃は、学生運動の余韻が残っており、「教師は敵」の時代だったので、教師に相談することはほとんどない、自分勝手にやる。話してくれる人が見つかったら聞きにいく、という感じでした。

しかし今は倫理委員会の許可と前準備が結構、大事(大変)なのかなと思います。もし本格的に大学院生や研究者が聞き取りをする時には倫理委員会を通さないといけない。必ず通さないといけない場合

院生はこれらを読むべきかと思います。

学部生には、佐藤郁哉『フィールドワーク 書をもって街に出よう 増改訂版』(新曜社、2006年、初版1992年)がもっとも適当です。また、谷富夫・芦田徹郎編『よくわかる質的調査 技法編』(ミネルヴァ書房、2009年)もよく出来ており、その「フィールドワーク」「参与観察」「インタビュー」「ライフストーリー分析」は参考になります。

インタビューという方法の根本には、「場の設定」や話し方の問題も重要です。1)どこで聞くかという「場の設定」は、語り手がリラックスできるかどうかを左右しますので、とても重要です。だいたい相手の自宅を訪問してインタビューをすることが理想でしょうが、ケースバイケースです。また、2)声の大きさ、話すスピード、間の取り方や呼吸、相槌のうちかた、等々もじつはとても重要かと思っています。しかしこれらはそれぞれ長年のもの(癖)があり、調整は難しいでしょうが、重要な要素だと思います。学生にも、姿勢やアイ・コンタクトについては説明しますが、この訓練は難しいでしょうか。基本は、真摯に聞くことです。

また、日本語で聞くか、韓国語や中国語や英語やポルトガル語などの語り手の母語で聞くかも、とても重要な問題です。残留婦人へのインタビューは日本語でも可能でしたが、中国語で聞いたほうがより「本音」を語ってくれるのではないかという批判を受けたこともありました。それこそ、聞き手がだれかによって語る内容が変わってくるのは当然でしょうが、インタビューの言語をどれにするかはもっと大きな要素となるでしょう。語りには、いわゆる事実的な側面とそれをどう思い返しているのかという評価に関する側面がありますが、前者はあまり変わりませんが、後者は聞き手がどのような立場性かに応じて、その語りが微妙に変化するのとは当然でしょうか。その点も含めて、「語りの構造」を解釈することが重要でしょう。

と、通さなくてもいい場合とあるようですが、結構、これは配慮しないといけない。(しかし、調査は生き物ですから、計画通りに進行するわけではない、いきなり展開することがあり、そのタイミングを逃さないのが大事ですが、委員会に出した計画と異なることがある。ですから、倫理委員会でがんじがらめにすると何も生まれない、緩やかに、する必要はあるのでしょうか)。ただ授業に関しては先生が責任をもち、学生は倫理委員会を通す必要はないのですが。

(2) 事前準備

では、前準備をどうするかです。調べ尽くしてインタビューに行くのか、あまり調べずにザクッと調べていくのか、何も知らないでいくのか。これもケースバイケースだと思います。教科書的には「調べていってください」と書いてありますし、学生にはそう説明をします。しかし、「構え」の強い人間からすると、調べすぎはよくない。柔軟に対応できる人は調べていっても、「構え」にとらわれずに(調べてないフリをして)、上手に聞くことが出来る人もいます。上智大学の学生は、わりと上手にこなしていきますね、相互作用が柔軟な人が多いようです。前準備はするにこしたことはないのですが、やりすぎるとフレームが強くなりすぎることになる。聞きたいことが先走ってしまいかねない、これもバランスでしょうか。

(3) 何人で聞くか

ついで、一人で聞くか複数で聞くか、です。一人前の研究者になっている人は一人でしか聞きたくない。一人で聞く方が、気が楽でいい。(それに相手との相互作用が一对一で自分が反映されやすい。)

ただ、二人で聞くと、一人が聞いて一人がフォローしてくれるので、聞き取りが偏った形にならずにバランスがとれた聞き取りができる。聞かないといけないことも忘れない。話し手と聞き手の、その時の関心でもってインタビューは進みますが、もういっぺん戻して、本来、聞くべきところを聞くこともできるし、多角的なインタビューになります。です、複数でいくのは、いっしょに仕事ができる

相性のいい人だったら、いいかなと思います。それに、調査実習などの場合は、学生には「複数でいってください」と必ずいいます。というのは何か(事故などが)あった時も、二人の方が対応できますし、一人が主に聞いて一人が主に記録するという役割分担もできますので、拔かりなく仕事ができるからです。

(4) 記録の仕方、ビジュアル・オーラル・ヒストリー

記録をどうとるかという、いまは録音することが前提になっていますね。それに、手軽に録画をとることが出来る時代になり、ビジュアル・オーラル・ヒストリー (VOH) も最近注目されていますが、これはかなり多様な情報が手に入って効果的だと思います¹⁵⁾。というのは、たとえば、この今の瞬間でも Zoom でも表情が見えますし、記録されており、重要な情報源となりますね。

いきなり話題が変わりますが、今年はコロナでオンライン授業になって悪かった点とよかった点があります。悪かった点は学生の表情が見えないこと、反応が見えないから壁に向かってしゃべっているみたい。もう一つ、授業がうまくいっているのかどうかかわからない。その反面、よかった点は、人前に出てくるのがいやだと思っていた学生が Zoom だと、わりと問題なくなって受講し、意外とうまく授業をとりだしたとか、がありました。それに、真面目にリアクション・ペーパーを書いてくれるので、相互作用がうまくいったりするなど予想外のこともありましたね。

元に戻りますと、録画しておくと、表情まで見える。情報源としてじつに多様で、奥が深い。(たとえば、インタビューの際の表情の動き、沈黙された時間とその間の表情などが活写されます。インタビューにおける「沈黙」の持つ意味を考える際に VOH は非常に貴重です。クロード・ランズマンの『SHOAH ショア』(1985 年)¹⁶⁾ はとても有名ですが、ホロコーストというテーマの重要性とともに、インタビューを映し出すカメラの効果が圧倒的で、世界中で話題作となりました。) これは結構いいと思うか、今後はとても貴重な取り組みになるかと思っ

15) 2019 年 3 月 10 日の JOHA シンポジウムは、「ビジュアル・オーラル・ヒストリーの可能性と現在」というものでしたが、とても刺激的でした。組織的なインタビューを行いアーカイブ化することを目指している場合は、このビジュアル・オーラル・ヒストリーは検討課題だと思いますし、世界の主流はこの方向に転換しているとも言えましょうか。たとえば、このシンポジウムの登壇者の一人である佐藤知久さんは、3・11 の東日本大震災を伝

える活動の一つである、せんだいメディアテークの「3 がつ 11 にちを忘れないためにセンター」の取り組みでの、ビジュアル・オーラル・ヒストリーの重要性について論じました。佐藤さんらのこの取り組みはとても興味深いもので、その実践については以下をご参照ください。佐藤知久・甲斐賢治・北野央『コミュニティ・アーカイブをつくろう！せんだいメディアテークの「3 がつ 11 にちを忘れないためにセンター」奮闘記」(晶文社、2018 年)。

ています。

(5) テープの起こし方、論文の書き方

さて、一番難しいのは聞き取りテープ資料をどう起こし、どう利用し、どう論文化するかです。この行程で大きく成果がわかりますし、方法もわかります。

私たちの世代は桜井厚さんに強く影響を受けていて、桜井さんを中心にフォーマット化された聞き取りの仕方があるんです。それは、「自分で聞いて、自分でテープを起こす、自分で起こさない人はプロじゃない。研究者じゃない」という規範です。その規範が強すぎて「業者に委託するなんて（ありえない）」と思っていた時期もありました。論文を書く人は自分で起こすのが前提になっていますが、参考資料をとるためにインタビュー（ヒヤリング）をしている人は必要な箇所だけテープを起こすとか、丸ごと業者に outsourching して、起こしたものをうまく利用していく（方法もあるかと思いますが）。それから速記録からつくっていく場合もあります（政治学系の「公人のオーラルヒストリー」の場合はだいたいこれがフォーマット化されているようです）。このように、オーラルヒストリーはその目的や専門領域によってその位置づけが多様ですし、それぞれのオーラルヒストリーに関するスタンスによってやり方が変わるのではないかと思います¹⁶⁾。

自分でテープを起こす利点は、なによりも、インタビューの場で見えていなかった点がよく見えてくることです。多様で、多声的な語りや、矛盾した語りが見えてくることです。しかも自分の聞き方のクセにも気づきます。自分の聞き方の欠点がわかってくるのです。そういう意味で自分でインタビューをして、テープ起こしをして、論文を書いていく、と

いう桜井さんらが定式化した方法はやはり一番望ましい方法かと思っています。（これは時間を取り、集中力が必要で、次から次に仕事を進める私にはなかなか難しく、うまくいきませんでした。）

4. インタビューの方法論

(1) 相互行為としてのインタビュー

インタビューを論文のなかでどう使うのか、研究する時にどう使うのか、というインタビューの方法論についてお話しします。

生活史研究の復権 私は1978年くらいから研究者の卵としてスタートし、1994年に最初の単著を出し、「こういう研究をしています」と自己紹介する形で活動していきましました（いまから振り返ると、ちょうど1980年代に生活史や口述史への関心が高まった時期に自分の研究生活がスタートしています）。そして、1990年代にインタビューをめぐる方法論が日本のなかで大きく転換していきます。1980年に中野卓が日本社会学会で会長就任講演をし、それを論文化（「個人の社会学的調査研究について」）したことが社会学にとって大きなターニングポイントとなります¹⁸⁾。（そして、これ以降、口述史、生活史、ライフヒストリー等が社会学の方法として注目されました。）

インタビュー論の転回 1990年代に（言語論的転回や記憶論的転回といった認識論が）大きく変わり、その牽引者のひとりであった桜井厚さんが、2000年代の初め、『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』（せりか書房）を2002年に出した。また、山田富秋さんたちがホルスタインとグブリアムの『アクティヴ・インタビュー』（同）を2004年に翻訳した。それに、P. トンプソンの『記憶から

16) クロード・ランズマン『SHOAH ショア』（1985年）に関する論考としては、鶴飼哲・高橋哲也編『「ショア」の衝撃』（未来社、1995年）があります。また、同時に琉球弧を記録する会『しまくつばで聞き取る 沖縄戦』（2005年）も大きな衝撃を与えました。しまくつば（沖縄言葉）で生き生きと語られる沖縄戦に関する語りは、沖縄戦に関する「語り直し」の持つ力が、言葉のリアリティとともに映像によって映し出される表情や語られる姿の持つ力を突きつけてきました。

17) 私は、自分の研究をイギリスの「下からの歴史」の文脈にある民衆のオーラルヒストリーに連なる研究であり、方法としての対話的構築主義に近いスタンスを基本としています。しかし、方法をそれだけにこだわるわけではありません。ただ、語りのなかには実証主義のいう事実的部分と構築主義がいう構築された部分がまじりっていると理解していますが、それは桜井さんも同

様かと理解しています。トピックやテーマによって、個々の語り手によってもその混ざりあいとは異なっていると理解しています。それに、取材やヒヤリングと呼ばれる比較的単一の事柄について短時間で聞き取るものから、それこそ数年かけて相手の人生（ライフヒストリー／ライフストーリー）を「丸ごと聞きとる」ようなものまで、インタビューといっても幅があります。それぞれの領域やテーマにしたがって、インタビューには様々なやり方や立場があっているかと思っています。ただその場合、自分がどのような立場でインタビューをしたのか、語りの構造についてどのように考えているかという自分の方法論・認識論については、論文化・作品化の際に自覚的に説明すべきでしょう。そのほうが誤解も少ないですし、その論文・作品への批判や再活用を行う場合に明確な指標となりますし、より生産的になるでしょう。

歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』（青木書店）の翻訳が（酒井順子さんによって）2002年に出されました。さらには、御厨貴さんの『公人のオーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録』（中公新書）も2002年に刊行されました。そして、ちょうどその翌年の2003年に「日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）」も設立されました。

このあたりが、オーラルヒストリーのルネッサンス期であり、もっとも脚光を浴びた時期です。その頃にインタビューの方法論が、かなり大きく変わっていったと思います。（ここでルネッサンスというのは、日本では柳田民俗学に代表されるような庶民の生活体験を聞き取るという戦前期からの長い伝統があったからです。それに、戦後は「民主化」の一つの流れとして労働者や農民や主婦という普通の民衆による「生活綴り方運動」などがあり、イギリスの「下からの歴史」に通じるような流れもありました。また、他方で「公人のオーラル・ヒストリー」に連なる政治家の語るものを聞きとるという伝統も長くありました。しかし、歴史学では実証主義が、社会学では計量分析による社会調査が優勢となり、これらの方法は片隅に追いやられがちだったのです。それが80年代から再び注目され、まさにオーラルヒストリーのルネッサンス期とも言える時を迎えたのです。）

インタビューの方法論が転換していった時、わりとそれにうまく乗っかって（適応して）社会学のなかでは「方法としてのインタビュー」が大きな位置を占めていきます。ただ、インタビューの方法論が大きく変わっていきませんが、それぞれのディシプリンによってその方法論の変化をどう受け止めていくのかは、その対応の違いもありました。

それまでは実証主義的な聞き取りが中心で、社会学も歴史学も政治学もそうで、ほとんどどれも変わらないところがありました。ベテランの研究者の方々は聞き取り（やヒヤリング）が上手で、それを上手に論文に使ってっていました。僕の（師匠的な）先輩として、益田尚三という民俗学・村落社会

学の先生や、松本通晴という地域社会学の先生がいました。彼らが村落にいったフィールドでインタビューする時にそばで聞かせてもらいましたが、本当に「うまいな、名人芸だな」と思っていました。それが1980年代まででして、1990年代、2000年代になって大きく変わっていきます。

what から how へ ポストモダンというか「記憶論的転回」とか「言語論的転回」というのが日本でも影響を与え、認識論が変わり、「方法としてのインタビュー」も変わっていきました。そのなかで、インタビューはただ相手が語ったものが、それが（事実を語ったもので）「本当だ」ということではなく、「何をいったか（what）」ということよりも、「どう語ったか（how）」が重要だという方向に展開していったと思います。ちょうど1980年代から1990年代にかけて私もどちらかというと実証主義的なインタビューをしていました。1994年に本を出した時も聞き取りをそのまま実証主義的に使っていました（ただ、いま読み返しますと、語りのなかで、聞き手がどのような人たちなのかによって語りも変わるということには気づいていて、語りの構築性や記憶論的転回の影響もうけていましたが、それが方法論的にこった煮の状況でした。従来の実証主義ともやはり違うし、構築主義でもないし、混とん、でした）。ちょうど似たような研究で2008年、坂部晶子さん、名古屋大学の先生ですが、彼女が満洲からの引揚者の満洲経験の研究をして（『満洲』経験の社会学—植民地の記憶のかたち』2008年）本を出しまして、私の先行研究を批判して「実証主義的で、インタビューをわかってないじゃないか」と評され、ショックでしたけど、そのとおりでした。坂部さんは「桜井後」、私は「桜井前」で桜井さんとほぼ同世代ですから、（私が本を出した1994年と坂部さんが出した2008年の間に）そこで大きく変わってきたのではないかと思います。

桜井さんが2002年に『インタビューの社会学』という方法論の転換を象徴するような本を書きまし

18) 中野卓「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』32巻2号、1981年。また、上智大学国際関係論に開設当初から所属されていた鶴見和子先生が、中野卓編著『口述の生活史 或る女の愛と呪いの日本近代』という作品を書評していました。とても興味深い内容ですので、簡単に紹介します。鶴見和子「書評・中野卓編著『口述の生活史 或る女の愛と呪いの日本近代』」（『社会学評論』32巻4号、1982年）で、鶴見は社会学のなかでの個人資料を使った古典であるトマス・ズナニエッキ『ポーランド農民』との比較から、本書の魅力を浮かび上がらせます。とりわけ、中野の聞き書きという方法のなかに

おける語り手の人生（ライフヒストリー）における転機を掲げた点と、かつ「聞き手と語り手の共同性」を強調する点とが興味深いものでした。なお、鶴見先生は1950年代から60年代にかけて民衆の、とりわけ女性の生活綴り方運動にかかわっていたことが、民衆の個人史、口述史への鶴見先生の関心の根底にあったことも忘れるべきではないでしょうか。詳細は、鶴飼正樹「鶴見和子文庫未公開資料から発見された生活綴り方文集『私の家』」（『人間学研究』9号、2009年、京都文教大学人学研究所）を参照ください。

た。また、2004年に翻訳が出ました『アクティヴ・インタビュー』の場合ですと、ホルスタインとグブリアムさんが出した本ですが、欧米での議論を踏まえ、従来の素朴なインタビュー論と違いました。(フェミニズムで有名となりましたが、)それを展開させていって「個人的な語りは社会的な語りである」となりました。「この人の語りはこの人だけの語りか」というと、そうであって、そうでない、と。(個人の語りには、個人的な体験に基づきながらも、そこには社会的な解釈が強く絡んでくる。しかも、語りは、語り手ひとりだけの一方的な行為ではなく、「聞き手」の存在が重要視され、「どう語るかは、どう聞くか」と相互規定的であるという側面がクローズアップされました)。

羅生門的現実と「証言」 個人の語りに対して「証言」という用語を歴史学では用いがちです。ある若手の歴史学者とそのことで議論したことがあります。歴史学は「証言」という言葉を好んで使いますが、証言とは何か、「証言というのは真実である」と。「沖縄戦で語られた証言は真実である」という。それは確かに、その人にとっての真実であるかもしれない。

しかし、それに対して「羅生門的現実」という見方がある。『羅生門』とは何か。芥川龍之介が書いた『羅生門』ですが、それをオスカー・ルイスが読んで「羅生門的な手法」を編み出します(『サンチェスの子どもたち メキシコの一家族の自伝』みすず書房、1961=1969・1986年)。すなわち、同じ場面に出会った人たちも、それぞれの立場で、あるいはどの角度から見たのかによって、その人にとって違う見え方がする。すなわち「複数のリアリティ」や複

数の現実がある、ということです。立場によってものの見え方が違ってくる。(「羅生門的現実」という概念が注目され、)このあたりからインタビューの語りに関する見方が大きく変わってきます¹⁹⁾。

社会的コンテキスト／語りの磁場 それに、私が見たとえAさんのところにおいて「お話を聞かせてください」といって、Aさんが私に語ってくれる時、私とAさんの関係が「社会的な真空」のなかで語られることは、絶対にはない。語りは、ある「社会的なコンテキスト(文脈)」のなかで語られる。(Aさんが常に一定のある真実を語るわけでもないですし、微妙に変わるのです。それはある意味自然で、当然なのです。逆に、誰が聞いても同じ語りがなされる場合、それは不自然ではないでしょうか。しかし、実証主義的には、語りは一定でなければならない、「反証可能性」という基準があり、誰が聞いてもその人は同じことを繰り返し応えてくれると、それが真実であり、「証言」であると²⁰⁾。確かに、似たような話はしますが、同じ話はしない。「語りの場」やそれを規定する時代性などの「語りの磁場」も、常に一定ではないからです²¹⁾。

聞き手と語り手の関係性 1980年代、1990年代、私は満洲からの引揚者の人たちにインタビューにいました。私は若手の社会学者で、大学の教師で、しかも「満洲植民地支配」云々という批判的な視点(眼差し)を持っている、その視点で見る、聞く、それが前に出ていってしまう。それに対して、引揚者の人たちは私の親の世代ですが、批判的な眼差しで見てくる若造に、自分の「本当の話」ができるのか、しかも「満洲からの引揚者というのは帝国支配

19) この点に関する本格的な議論としては、蘭信三(2015)を参照ください。また、シンポジウム記録で読みやすいものとしては、同(2016)があります。この特集には、大門正克さんの論考も所収されており、参考になるかと思えます。

20) の若手の歴史学者は、森亜紀子さんです。森さんは、沖縄における「南洋」からの引揚者の聞き取りを長期間かけて行っている方で、研究成果の一端は『複数の旋律を聞く：沖縄・南洋群島に生きたひとびとの声と生』(新月舎、2016年)にまとめられています。これは、森さんが行っている聞き取り実践の素晴らしい研究成果のひとつです。さて、JOHAでの彼女の報告に対して、沖縄では「証言」が多用されるが、それは実証主義的な確かな「証言」という言い方は「羅生門的現実」という見方を踏まえると森さんが使う「証言」とはどのような意味なのか、歴史学の従来の立場は通用しないのではないか、といった質問をしました。それに対して、森さんが「証言」というのは、それは彼らの「生きた証」としての意味だと答えました。見事な答えだと思いましたが、しかし、「生きた証」としての語りとなれば、それは語り手の

社会的立場を含めての当該事件(たとえば沖縄戦)への関わりかた(それこそ人生)が反映されているものであって、単なる事実を証言しているのではないでしょう。もちろん、その場合も、「あのとき・あそこ」での出来事の実在性と、それを語り合ってきた沖縄の人びとのポジショナリティを含めた「リアリティ」によって規定された解釈(意味付与)がミックスされた語りだと言えるでしょう。すなわち、日本社会が語る沖縄戦へのマスター・ナラティブに対抗する沖縄のもうひとつの語り、そして自分たちが準拠する集団の語り(モデル・ストーリー)などによって、規定されながら語られる「語りの構造」を抜きには、一人ひとりの語りは解釈できないのではないでしょう。

21) 「語りの磁場」は、「語りのコンテキスト」と呼ばれるものとはほぼ同意ですが、語りを規定するポリティクスをより強調する意図で「磁場」と表現しています。一般的にはすべての語りは語られる際のマクロ・ミクロ双方の文脈(「コンテキスト」)に規定されます。また、「語りの磁場」は時代性によって変化することも当然です。詳細は、蘭信三(2007)を参照ください。

の尖兵だった」という社会的なレッテルを張ってくる。「引揚者は植民地から逃げてきて戦後、迷惑をかけやがった奴らだ」という戦後社会で迷惑がられた社会的文脈もある。そういうなかで話をされる時には、必ず「あなたにはわからんでしょう。あなたみたいな大学の先生には私たちの苦労はわからんでしょう」「どうせ私たちが何をいったって、言い訳にしか思わないでしょう」と先にいわれるのですね。状況としてインタビューは成立しづらい。

そこを何とかかい潜って、「いや、聞かせてください」というんですが、そういうなかでボロツ、ボロツと話をしてくれる。それは、社会のなかで満洲引揚者はどういう位置づけ（解釈だった）なのかという社会的文脈が大きい。しかも聞き手である私がどういう人間なのかがわからないと話してくれない。ですから、私も時々自分語りをしなくちゃいけない。「私の父親は戦地に10年いて、復員兵として帰ってきて。うちの家族は戦後、苦労した。両親は「写真結婚」をして、母は本家で耐えて、父を待っていました。戦後は貧乏で、母が行商をして生活を支えて…」という話をしていくなかで、相手も「あ、そうか、お前の親父は復員兵なのか、お母さんは苦労されたろう」ということで共感して、話をしてくれる。「お前、偉そうにしているけど、そうじゃなくて、そういう苦労をしてきたんだな」と共感しつつ、「戦後、復員兵やその家族というのは社会的にどういう位置づけだったのか」を踏まえつつ話してくれる、ことがある。

語りの構造 個人の語りは「社会的コンテクスト」のなかで語られる。そのなかでも、「自分だけの語り」、「その人個人の語り」もあり、同時に同様な体験をした人たち（集団）の「モデル・ストーリー」がある。引揚者はどういうものかということに関して、「戦前の日本の植民地支配に加担した奴ら」という「社会の語り（マスター・ナラティブ）」がある。「自分だけの語り」は独立してあるかといえ、そうではない。どんな個人的なことを語っても、「どれだけ満洲で被害を受けたか。どれだけ悲惨な目に会い、命からがら引き揚げてきたか」という同じような体験を共有する人たちによる「モデル・ストーリー」の語りがその中核にある。個々の、個人のなかには特有な体験があるが、その解釈や語りには社会的な側面が大きく規定してくる（アルヴァックスの集合的記憶論で言われるように）。「語り」の中に「輻輳した語り」があり、いくつもの語りが重層化されていく。「語りの構造」をどれだけきちんと見るか、それを研究として考えていくと、そのレベルをどこまで深く掘り下げ理解できるかどうか、に、研究者として

の真骨頂が問われる、と思います。

桜井厚さんが2002年に（研ぎ澄まされた方法論を）出し、私が1994年に本を出し、坂部晶子さんは2008年に本を出して坂部さんに批判されたわけですが、坂部さんを育てた先生の一人は僕なのですが、「ほんとにそのとおりだな。俺は理解できていない、わかっていなかったな」と思いました。2000年代になって、やっと私も「聞き手」と「語り手」との「語りの社会的なコンテクスト」、語りのなかには、時代によって「磁場」が変わることもわかってきました（蘭（2007））。桜井厚さんがいう「対話的構築主義」ということも、少しずつ理解していったと思います。

（2）個人史と社会史、社会学の接続

さて、私の研究は、日本の植民地等からの戦後引揚げがどういう背景で行われてきたか、それが国際社会とどのような関係にあったかという帝国史や世界史と接合していく研究をしながら、片方において個々の体験者にインタビューをしてきました。「あなたのやり方は個人史もやりながら社会史（や帝国史）もやっている。社会史（や帝国史）と個人史はどう接合していくんだ」と、よく聞かれました。フェミニズム的にいえば「個人的なことは政治的である」と。「個人の語りはポリティカルである」と。そこで「語りのなかにどのような社会性があるのか」を分析していくということが出来ます。そういうなかで聞き取りの「個人史」と「社会史」を接合していくことを今までやってきたのかなと思います。

今年（2020年）の後期の授業の「国際社会学Ⅱ」で、3人の大学院生をゲストに呼んでスピーチをしてもらいました。一人目は東大の院生で在日三・五世、二人目は一橋大学の院生で30代の中国残留婦人の孫（いわば中国残留日本人「三世」）。もう一人は大阪大学の院生で台湾出身のニューカマーの子。この3人が自分のファミリーヒストリーや個人史と自分の研究（帝国史や世界史や華僑研究）を接合しながらスピーチをしてくれました。僕自身も3人の若手の話を聞いて感動しましたし、「見事だな」と思いました。自分の個人的なパーソナルヒストリーのなかに様々な社会的なバックグラウンド（すなわち「大日本帝国」崩壊後のポストコロニアルな歴史）が絡んでいることを見事に語ってくれました。

それを聞いた上智の学部生たちは感動するだけではなく、社会史だけで学ぶこととは違う学びの場がそこにあると了解する。学生の書いたリアクション・ペーパーを見ても感動するほどの内容の濃さがありました。時々、それを読みながら一人で泣くんですね、ここまで書けるのか、と感心し感動しました。（今

年度は、私の上智大学での最後の授業なのですが、このような質の高いやり取りができるのは嬉しい限りですね、これは学生たちから私への「饒別」かと思っています。）

(3) 正面の歴史と側面の歴史—「いま・ここ」と「あのとき・あそこ」

インタビューにおいて、個人の語りに社会的な文脈が入りこんでくる。「what」と「how」に関して私と次に話してくれる李洪章さんとは立場性がやや違うと思います。私は桜井厚さんとの関係で方法論や認識論が出来てきていて、李さんは岸政彦さんとの関係で研究の方法論が培われている。先行研究が岸政彦さんなんですね。岸政彦さんの先行研究は桜井厚さんなのですが、じつは「how」と「what」の関係性において、これまでの社会学のなかでも、いくつかの経緯がある。このことは李さんが話をされると思います。

ただ、私は、「how いか」に語られるか」と、「what 何が語られるか」の二項対立（がゼロサム）ではなく、両方がともに語りの構造を規定しており、その二つの要素がどうかかわっているかを明らかにすることが重要だと考えています。当たり前のことですが²²⁾。

別の言い方をしますと、「体験・記憶」というのには「正面の歴史」と「側面の歴史」があると。この言葉を使い出したのは浜日出夫（2000）さんですが、科学哲学者の野家啓一さんの議論をアレンジし、これを野上元（2015）さんという筑波大学の方が洗練し、「正面の歴史」と「側面の歴史」について詳しく述べています。時代と併走しながら「側面」から見る歴史、すなわち時系列的な歴史がある。その一方で、「正面の歴史」というのは、2020年の今から1950年、60年、80、90年代を「逆なで」に見ていくこと。「今から過去を遡って見た時に見えるもの」と、1950年代当時を外から見ていく、側面から見ていくのとは、見え方は違うのではないかと、野家啓一さんはいわれました。それを、浜日出夫さんは社会学研究に応用し、野上元さんがそれを受け継ぎ澄ませ「正面の歴史」と「側面の歴史」への自覚的なアプローチを促しています。

さらに、社会学者の好井裕明（2000）さんは、「いま・

ここ」と、「あのとき・あそこ」と簡単に言い表していますが、「いま・ここ」から「あのとき・あそこ」を振り返った時、「あのとき・あそこ」にいた時の体験を「いま・ここ」でそのままいえるかということ、それは違っている、と。それはなぜか。その間の時間の経過があるから、その間に体験したことがあるから、その間の時間で体験したことで「あのとき・あそこ」の体験は経験となる、時間が「あのとき・あそこ」の原体験をろ過し、経験として意味付けて、「いま・ここ」の語りがあるのだと思います²³⁾。

ライフストーリーを聞きとる意味 個人的な話をしますと、私は2008年に京大から上智大学に移動しました。あんなに可愛がっていた（当時修士2年の）李洪章さんを置いて、僕は上智に移った。13年前を振り返ってみると、いまは「出てもよかったし、出なくもよかった」と思う。しかし、その当時は、私は「不幸だ」という思いのかたまりだった。「なんで私はこれだけ研究しているのに（不遇なのだ）！」と、ボンと京大を飛び出ていった。しかしその後、上智大学にきて不遇ではなかった、研究もよくできたし、とりわけ学生に恵まれた。その結果、出てきたことに対していまは悲しいとも思わない。しかし、その当時はよく泣きました。

上智大学に異動してきた時、最初に新任教員と大学の学長や理事長などの執行部との懇親会があった時、スピーチで言ったことを覚えています。「失礼ですが、私の「人生は終わった」と思って上智に来ました」と。だけど「学生が、授業を熱心に聞いてくれた。こんなに真剣に聞いてくれる学生がいる、もう一度「生き直そう」と思いました」と。学生の真剣さに僕は救われ、「生き直そう」と思った。今になって振り返ってみると、「そういうこともあったな」と。今から見ると「あれはあれで俺の人生だったんだな」と（思えます）。13年間の歴史のなかでやり抜いてきた思いがあるのでね、しかしその当時はとても後悔したし、（私は負けたと）悔しかったけど、いまは、後悔はそれほどない。あれはあれで私の人生だったのだ、と思いますね。（受容できない出来事がその後の時間の経過のなかで、体験を経るなかで経験として受容されていったのだと思います。ですから、2008年当時の私の語りと、現在の私

22) 蘭信三（2015）を参照ください。

23) 野家啓一さんの議論は『物語の哲学—柳田國男と歴史の発見』（岩波書店、2005年、初版1996年）が読みやすいです。また、浜日出夫『「歴史の社会学」の可能性』（『情況』8月号別冊、2000年）、野上元「序論」野上・小林多寿子編『歴史と向き合う社会学』（ミネルヴァ書房、

2015年）を参照ください。好井裕明さんには多くの論考がありますが、この議論については同「語らせるワーク」と「語りの様式」—Doing Life Historyをめぐる諸問題」（『現代社会学』第1号、2000年、広島国際学院大学現代社会学）がもっともわかりやすく議論されているので、ご参照ください。

の語りは当然違ってきていると思います。そのことへの私の解釈も、自分の人生におけるそのことの位置づけも変わっているからです。あのことは、自分のなかでの「悲劇」からある種の「蓋然」へと変わっているのです。それが個人のライフストーリーを聞くことの意味だと言えましょうか²⁴⁾。

トラウマ的記憶の聞きとりの困難 最後に、トラウマ的記憶の聞き取りについて話します。上野千鶴子さんたちといっしょに出した『戦争と性暴力の比較史へ向けて』（2018）のなかで石田米子さんたちの中国山西省での日中戦争時の性暴力に関する聞き取り作品についてレビューしています。これはすごい聞き取りだったと思いましたし、そこでも絶賛しています。（じっさい、このような企画はもう二度と出来ないかもしれません。）しかし、来年1月に共同研究をしているグループで出す本があるのですが²⁵⁾、そのなかに所収されている（甲南大学の）森茂起さんの論文を読んだ時、「トラウマ的体験の聞き取り」に対して彼はプロ中のプロですが、いろいろなことが書かれているのです。それを読んで感じたのは、石田米子さんたちはまったくトラウマ的な体験の予備知識なしに中国での研究に飛び込んでいった。それは、「よくぞ、あそこまで聞き取りをされた」と感動するような凄い研究ですが、他方でものすごくリスクな仕事だったなと思います（それは、トラウマ的な体験のフラッシュバックで語り手が再び精神的にしんどくなること、同時に聞き手も「トラウマの感染」によって、精神的にダメージを受けたりするからです）。

また、同時に聞き取りのなかで、フェミニズムにおける性暴力関係の聞き取りは特にそうですが、研究者は「性暴力を受けた人たちのトラウマからの解放を目指す」ことを一つの価値として、ある種、介入的なインタビューになっているのです。この方法論に関しては、きっちり議論し、学習していかないとけない、いま、そのことの難しさを感じています。

さて、アーカイブをどうするかが最後に残りましたが、これは1月22日にある会場で話をしますが、このことはこれから非常に大事になってくると思います²⁶⁾。

がしかし、今日はこれで時間切れでしょうか。

5. おわりに

インタビューは私の研究者としてのドアを開いてくれた「魔法の扉」だった。インタビューという方法に出会えていなかったら、大学院を途中で辞めてどこかで働いていたと思います。そして、あの二つのインタビューに出会えていなかったら、私は（本当の意味での）研究者になれなかった。研究者としての私の人生にとって、「インタビューは魔法の扉」だったと思っています。

これで私の話を終わりたいと思います。みなさん、ご清聴、ありがとうございました。

蘭 第二部の第一報告は李洪章さんです。よろしくお願いします。

第二部①「インタビューにおける共同性を記述すること」

李 洪章（神戸学院大学）

1. 研究の道に進んだ動機

まず自己紹介からはじめたいと思います。私は在

日朝鮮人3世で、主に現代に生きる在日朝鮮人のエスニシティ、ナショナリズムに関する研究をしています。2016年、博士論文をもとに単著『在日朝鮮人という民族経験』（生活書院）を出版しましたが、

24) ある講演会後の少人数での懇談の場でこのエピソードを紹介しましたら、ある知人に「何が悲劇だ、京大から上智に異動したことにどこに問題があるのだ。ただ、学風が変わっただけではないか！（あんたのエリート主義にはヘドが出る。）いいかげんにせんか！」と激怒されました。いま振り返ると、私もまったく同感ですが、ここにポイントがあるでしょうか。客観的にはそう見えても、その時点での当人の感覚としては、自分の人生は「挫折」した、と思ったのです。この「当人にとってのリアリティ」を理解することこそが、ライフストーリー的インタビュー（あるいはすべてのインタビュー）のポイントであり、醍醐味でしょうか。

25) 蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』（みずき書林、2021年）です。そのなかの森茂起「戦争体験の聞き取りにおけるトラウマ記憶の扱い」で、トラウマ的記憶の聞きとりに関する貴重な議論がなされています。ご参照ください。

26) オーラルヒストリーのアーカイブ化に関しては、以下の特集があります。「特集2 オーラルヒストリーのアーカイブ化を目指して」『日本オーラル・ヒストリー研究』第15号（2019年）。その特集の安岡論文、小林論文が大いに参考になります。

そこでは、在日朝鮮人社会の内部で特に「周縁」におかれがちな人々、「マイノリティ・イン・マイノリティ」の存在に着目して彼、彼女らが日常生活において自らの「マイノリティ」性をめぐって何を経験し、その上で民族、在日朝鮮人同士の共同性、本国とのつながり、民族のありようについて個々人が、どう考え、民族をどう追求しているかを記述することを試みました。今日は、その過程で経験したことについてお話をさせていただきたいと思います。

そもそも私がこういう研究を行うようになったきっかけは、大学生の頃、ある在日朝鮮人学生運動に携わるなかで、自らがそれまでに感じてきた在日朝鮮人としての生きづらさの要因が、自分自身にあるわけではなく、継続する植民地主義を背景したものであり、そのスティグマを克服していくためには、「民族」というものと正面から向き合っていく必要があると、大学4年間の活動を通じて考えるようになった点にあります。

2. ダブルへの着目

ただ、その活動の中で、日本人と在日朝鮮人の間に生まれた「ダブル」との出会いがありました。その出会いが、私のそうした考えが、必ずしも「ダブル」の人たちと一足飛びに共有できるとは限らないということを気づかせてくれました。2000年代初頭、当時はすでに国際結婚も相当数にのぼっていて、「ダブル」がもはや在日朝鮮人社会の中でも数的にマジョリティであることは私自身も認識していましたし、従来のように「民族」というものを「血統」に基づいて定義するのはナンセンスであるとは考えていました。その上で、民族の定義のあり方としては、血統主義に対するオルタナティブとして、歴史性、即ち「植民地主義の被害性」に依拠するしかないと考えていたわけです。歴史性の共有がもし困難だとすれば、果たして他にどういう「共同性」を構想していけばいいのか、皆目、見当がつきませんでしたので、その妥当性について考えるためにも、「ダブル」の人々が「民族」をめぐって何を経験し、何を考えているかを詳しく聞いてみよう、調査に向かうことになりました。

学部は工学部出身で、社会調査に関する基礎的なトレーニングも学部時代は受けておらず、修士から蘭信三先生の研究室にお世話になり、突貫工事で調

査法の基礎を学び、修論執筆のために調査に出かけていきました。ただ大学入学以前の鬱屈した心情から大学入学後に解放された経験を相対化するのは難しいことで、それゆえに修士の間は、「ダブル」の語りのなかに在日朝鮮人の歴史性との接点を見出すという方向性で、「語り」を解釈しようとしていたように思います。ただ調査の過程で、京都の在日朝鮮人集住地区である東九条において、「パラムの会」という、「ダブル」を中心に活動していた団体のメンバーだった方にインタビューした際、私のそうした目論見が見透かされ、打ち碎かれるような経験をしました。私が、在日朝鮮人の被害性にダブルも含めた在日朝鮮人の結節点を見出そうとしたのに対して、かれは、「人は一貫して被害者でもあり、加害者でもあるのではないか」と問い返してきたのです。しかし、当時の私は、この語りを、在日朝鮮人の歴史性、つまりは植民地主義の被害性というものを捨象することにつながりかねない語りであると判断してしまいました。修論はそういうスタンスで書いたのですが、その後、2016年に出版した単著においてはその書き方も大きく変わりました。事前にかれに目を通していただいた際、当時の私の印象について「とにかく話の通じない若者だと思った」といわれたのが印象に残っているのですが、これは要するに、私と対象者とのインタビューは、発話がかみ合わない、非対話的な関係に陥ってしまっていたことを意味しています。

3. 「当事者」研究の陥穽

なぜそういうことが起きてしまったのか。まさに桜井厚さん²⁷⁾や好井裕明さん²⁸⁾が再三指摘されているように、「調査者によるカテゴリー化の暴力が顕在化してしまった」ということだと思っています。さらにいうと、この事例においては、「カテゴリー化の暴力」が「当事者」というカテゴリーに関しても例外ではないということの意味していると思います。当事者研究には従来、「暗黙知」、すなわち言葉にならない感覚的な知識や、「経験知」の記述可能性が期待されてきました。当事者だからこそわかる「内なる声」とか、当事者同士だからこそ経験を共有できるという前提が、まさに「カテゴリー化への暴力」へと結びつきうるんだと、当時の調査経験を振り返るなかで、まざまざと思い知らされることになったわけです。

27) 桜井厚、2002、『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

28) 好井裕明、1999、『批判的エスノメソドロジーの語り——差別の日常を読み解く』新曜社。

この点、樋口直人さん²⁹⁾の指摘は重要だと思います。樋口さんは「調査者にとっての当事者性」について「研究者の無徴性そのものに疑問を呈することではなく、本来は無徴な研究者が研究に必要な特性を身にまとうだけにすぎない」といっています。これは即ち、一方で厳格な方法論に従うことで研究者の無徴性を維持し、研究の客観性も中立性を保とうとしてきたわけでもなく、他方で研究者としての有徴性、即ち、調査や研究に付随する根源的な権力性や研究という営みや研究者そのものが対象者の行為に影響を与えるんだと議論を重ねてきたわけでもない。つまり当事者研究は「当事者」というカテゴリーに甘んじてきた、ということだと思います。

まさにこの、「無徴性」と「有徴性」の狭間で逡巡するなかで、私自身は現在、「当事者」に安住することなく、「研究者の無徴性／有徴性」に対して何らかの姿勢を表明する必要性があると考えています。もしかすると「非当事者」としてインタビュー調査をする方にとってはあたりまえの議論かもしれませんが。調査者として単にスタート地点に立ったということにすぎないのかもしれませんが、今から思うと、教科書どおりではなく、方法論に関して試行錯誤する機会を得たという意味では、いい経験だったと思っています。

今述べてきたインタビュー調査の経験を客観的に見つめ直すにあたって拠り所としたのは桜井厚の「対話的構築主義」でした。蘭先生がさきほど「私の先行研究は岸政彦だ」といわれましたが、私自身は、方法論のベースは桜井さんの議論にあると思っています。「対話的構築主義」の議論に触れたのは修士の頃、蘭先生から本をプレゼントしていただいたのがきっかけです。当時のことを思い返すと、蘭先生は「方法論をちゃんと勉強しろ」ということだけでなく、当時の私の調査に向かう姿勢に対するメッセージも込めて手渡してくれたのではないかと思います。この「対話的構築主義」に触れることによって、「調査に失敗したからこの件に関しては何も書けない」と考えるのではなく、「経験そのものについて何か記述することができるのではないか」と思えたのは大きなことでした。ただ同時に、自分自身の調査経験について記述することが、社会調査として

何の意味を成すのか。それは私自身の独白にすぎなくて、それを書くために他者にしんどい思いをさせてまでインタビューをする必要があるのか、と、同時に自問するようになりました。蘭由岐子先生³⁰⁾の論考でも「これはもはや社会調査ではないのか？」と自問されていますが、確かに記述の対象を「私」と「対象者」との関係に限定をすれば聞き取りの営みを社会調査につなぎとめることができるかもしれませんが、他方で、そもそも調査の目的は他者の生を記述する点にあるわけで、後者の目的から離れていってしまうのではないかという問題も当時、立ち現れてくる。この点に関しては蘭信三先生³¹⁾も『日本歴史』に掲載された論考の中で桜井さんの仕事に対して「事実から対話へという形で構築する重心を移しているとはいえ、実際の作品の中で実証性を必ずしも放棄しているわけではない」と指摘されていますが、桜井さんの仕事に限らず、「対話的構築主義」を標榜する多くの作品に、いえることではないかと思います。そういう点では私自身の研究も、そうだとことです。

4. インタビューにおける共同性を記述する

こういう問題を乗り越えるための議論はさまざまにあるかと思いますが、近年、代表的なのは岸政彦さんの「鉤括弧を外す」³²⁾という方向性かと思います。岸さんは「対話的構築主義」だと調査者が事実というものを常に鉤括弧に括ったものにせざるをえない。つまり実在する問題に直接言及できない状況を生んでいると批判をした上で、それに対して、自分自身の理論に変更を加え、鉤括弧を外す方向に向かうべきであると主張されています。たとえば、「差別されたことがない」というマイノリティの語りをどう取り扱うのかについて、「差別的な現状が差別を語れなくさせている」と解釈したり、文字通り「差別はなかった」と受け止めたりするのではなく、あるいは差別に言及することを保留するのではなく、差別という概念からは捉えきれないその語りを、「他者化」という概念で理解しようとするわけです。岸さんの議論は「実証主義」に立ち返る流れだと思いますが、私は、この方向性に基本的に賛同します。なぜならば、私が調査を通じて知りたいことは

29) 樋口直人、2010、「あなたも当事者である——再帰的当事者論の方へ」宮内洋・好井裕明編著『〈当事者〉をめぐる社会学——調査での出会いを通して』北大路書房、83-103。

30) 蘭由岐子、2005、「これはもはや社会調査ではないのか?——ハンセン病者研究とその展開」『社会情報』15(1): 61-75。

31) 蘭信三、2015、「オーラルヒストリーの展開と課題——歴史学と社会学の狭間から」大津透・桜井英治・藤井譲治・吉田裕・李成市編『岩波講座 日本歴史 第21巻 史料論』岩波書店、209-241。

32) 岸政彦、2018、『マンゴーと手榴弾——生活史の理論——』勁草書房。

“What”、つまり、「調査対象者が何を経験してきたのか」だからです。あくまでも読者は調査者のことを知りたいのではなく、調査対象者について知りたいのだ、ということとはよく言われることですが、それはまさにそのとおりだと。

ただ同時に、「調査者」と「対象者」の相互行為について記述することも、場合によっては必要ではないかと考えています。その理由は、どういうプロセスを踏んで鉤括弧を外したのか、その理論化の過程について、他者が検証できる可能性を担保する必要があるのではないと思うからです。あるいは、アップデートする以前の理論ではなぜ「対象者の語り」を理解できなかったのかについて、読者も確認することができるようにしておく必要があるのではないかと考えるからです。

このような方法論に関する議論を踏まえた上で、単著で実践したことについてお話をします。私は、冒頭に紹介した調査対象者による、「人は一貫して被害者でもあり、加害者でもある」という語りを、私との膠着した対話を突破するための実践的な語りとして描きだすことを試みました。つまりは、インタビューの場における相互行為を「在日朝鮮人をめぐる新たな共同性の萌芽」として位置づけようとしたわけです。そうすることによって、インタビューという相互行為について記述することが、本来の私の研究目的から大きくずれることなく、記述可能になるのではないかと考えたわけです。

もっと具体的に申しますと、インタビューの対象者が「対話」を拒絶することに対して何を語ったのか。対象者は教会の牧師さんなのですが、祖母の話をされた。おばあさんが敬虔なクリスチャンだった。ただ1940年に、彼の祖母が所属していた日本基督教会が日本基督教会に併合されたという歴史があります。この歴史的事実をめぐって、彼は「孫」の立場からすると「被害性」を引き継いでいるわけですが、同時に、日本基督教教会を前身とする「日本

キリスト改革派教会」の「牧師」としては「加害」の立場にある。彼はこの歴史的事実をめぐって「加害と被害、その両方の立場を自ら「罪責」として引き受ける」と語りました。これは「加害」と「被害」の双方を、現在に至るまで解消させることができていないことに対する「罪」として引き受けることを意味します。この「語り」に触れることで私は従来、私自身もとらわれていた「加害」と「被害」の二分法の下でとらえてきた歴史性の概念をアップデートし、そこに歴史をめぐる共感の可能性を見出すことができたわけです³³⁾。もちろん、こういうプロセスをすっ飛ばして、始めから「鉤括弧を外した」状態で歴史性を「加害」と「被害」の二元論から定義することはナンセンスだといってしまうこともできないと思いますが、おそらく私がインタビューの場で経験したことは、多くの読者にとっても示唆に富んだ一つの事例だろうと考えて、この調査経験について記述をしました。

ただし、今後、むやみに「私」について書こうとは思っていません。読者が知りたいのはそこではないからです。私は現在、在日朝鮮人にとっての民族について、本国とのつながりの部分に着目して研究を進めたいと考え、現在、調査を行っています。本国への帰還移動に着目して研究を進めていまして、たとえば参考資料にも、韓国人男性と結婚した在日朝鮮人女性の韓国経験に関する論考³⁴⁾を掲載していますが、それは基本的には素朴な「実証主義」のスタイルで書いています。ただ今後、論文を書くなかで、再び、私を登場させざるをえない機会は、きっとまたあるでしょうし、常にそういう姿勢を維持しながら今後も研究に取り組んでいきたいと思っています。以上、私が調査を経験する中で、これまで考えてきたことをお話しさせていただきました。ご静聴ありがとうございます。

蘭 李さん、非常に見事な展開の報告をありがとうございます。続けて次の報告に移っていききたいと思います。人見さんよろしくお願いします。

第二部②「聞き取り実践——歴史学の立場から」 人見佐知子（近畿大学）

1. はじめに

最初に自己紹介をしたいと思います。このような

場で自分の専門分野を紹介するときには、たいいてい女性史やジェンダー史を勉強しています、といひます。とくに、遊廓や性売買の歴史に関心をもって研究をしています。対象とする時期は、おもに明治・

33) 詳細は拙著（李洪章、2016、『在日朝鮮人という民族経験——個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院）の第4章をご参照ください。

34) 李洪章、2018、「在日朝鮮人女性が経験する「韓国」：結婚移住をめぐる語りを通して」『現代社会研究』4:54-72。

大正期で、インタビューという方法を用いて性売買の歴史について論文を書いたことはありません。そういう者が、なぜこの場によばれたのかと思われるかもしれません。

わたしがオーラル・ヒストリーにかかわるようになったのは性売買の歴史を研究するための方法論的な要請や内発的な動機にもとづいて、というわけではありません。甲南大学人間科学研究所というのは、臨床心理学の研究者を主体とする研究所です。そこが、「子ども時代の戦争体験」の共同研究を立ち上げ、研究員を募集していました。2009年のことです。「1931年～1945年に生まれ、子ども時代に戦争を体験した人たちにインタビューをし、その体験を記録すること、また、戦争体験におけるトラウマ性の記憶に注目し、その体験が、後の人生にどのような影響を及ぼしたのか、トラウマ性記憶の扱いやその理解を目指すこと」を目的とした共同研究でした³⁵⁾。

これは、「心理療法の実践」という心理学的な観点からの研究ですが、それだけではなく、トラウマ的な性質であるために、これまで語られることがなかった体験が語られる可能性もあり、その意味で新しい事実の掘り起こしが期待されるため、歴史学的な観点からも興味深い取り組みでした。それで歴史学を専攻する研究員の公募があったと思われます。当時、わたしは博士論文を出して3年目で就職活動中でした。とくに戦争体験の研究をしていたわけではなく、そういう論文も書いていませんでしたが、応募して採用してもらいました。

そこで初めてインタビューを経験しました。ズブの素人だったわけですが、幸いといえますか、心理学の方法にのっとって行われたこのプロジェクトでは、インタビューの方法というものはある程度決まっていました。インタビュー・ガイドという事前に用意された質問項目があり、基本的にはそれにそってプロジェクトメンバーがそれぞれインタビューをおこない、インタビュー内容をメンバー間で共有して分析をすすめるというやり方でした。わたしはインタビュー初心者でしたので、最初は経験者のメンバーと同席してやり方を学ばせていただき、見よう、見まねでインタビューをおこないました。

そういうわけですので、わたしがインタビューの

方法ということで、この場でお話できることはほとんどありません。わたしが自己紹介でオーラル・ヒストリーにふれないのはこのような理由があります。それでも、気づいたらプロジェクトに参加してから10年くらいたっていて（プロジェクト自体は2014年に終了しました）、書いたものもリストにしてみるとけっこうな数になっていました。それで、今回、この場によばれました。

今日、ここで考えたいと思っているのは「インタビューの方法」というよりも、「聞き取った内容をどのように叙述するか」という問題です。蘭先生は「オーラルヒストリーの展開と課題」³⁶⁾で、オーラル・ヒストリーは、もはや構築主義か実証主義かを問う段階を超えて、「過去の体験の実証性」と「記憶のされかたや語りの際の構築性」を架橋する方法が議論されるべき段階にあると述べられました。それは、歴史叙述の問題とかかわっているのではないかというのがわたしの認識です。

2. 事例紹介

玉井洋子さんのことをお話したいと思います。玉井さんのことは、2015年と2016年に文章にしました³⁷⁾。それをもとに、さいきん、「戦争を〈体験〉するということ」という文章を書きました。蘭先生たちが編纂した『なぜ戦争体験を継承するのか』という本のなかに入っています³⁸⁾。2020年に刊行予定とうかがっていたので、さいしょはこれを参考資料としてお配りしようと思っていたのですが、刊行は2021年になりましたので、もともなった文章を配布しています。

わたしが玉井さんに出会ったのは、2000年代の前半で、そのとき玉井さんは、「神戸空襲を記録する会」の中心的なメンバーの一人でした。直接お話をうかがう機会はなかったのですが、なんとなく玉井さんも空襲の体験者だろうと思っていました。

さきに述べましたように、甲南大学のプロジェクトに参加することとなって、文章もいくつか書いていくうちに、研究会によばれたりチョコチョコとコメントを求められたりするようになりました。「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」は、毎年8月

35) 共同研究は2014年に終了し、その成果は、森茂起・港道隆編『戦争の子ども』を考える——体験の記録と理解の試み』（平凡社、2012年）にまとめられた。

36) 『岩波講座日本歴史 第21巻 史料論』（岩波書店、2015年）。

37) 人見佐知子「空襲体験とは何か」（『歴史と神戸』

54巻1号、2015年）、人見佐知子「わたしと〈戦争体験〉」（『部落問題研究』217号、2016年）。

38) 人見佐知子「戦争を〈体験〉するということ」（蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか』みずき書林、2021年）。

に戦災があった各地で全国大会を開催しています。その第44回大会は神戸で開催されました。それで、主催者となった神戸空襲を記録する会から、聞き取りの経験や、体験を継承することの意味などについてコメントを頼まれました。わたしは2日めに登壇することになっていたのですが、1日めのある報告にとってもショックをうけました。

それが、玉井洋子さんの報告でした。玉井さんは、「わたしが出会った人たち」というタイトルで、自身と神戸空襲を記録する会とのかかわりをお話されました。

わたしはそのときはじめて玉井さんが空襲体験者ではなかったことを知りました。それ自体も驚きだったのですが、なによりも、玉井さんのお話にとっても感銘をうけました。なぜなら、直接の空襲体験者（当事者）ではない玉井さんが、玉井さんが出会った当事者の戦争体験に触れるなかで、玉井さん独自の仕方、玉井さんが空襲を〈体験〉するさまが、そのときに玉井さんが受けた衝撃とともに伝わってきたからです。

あとでも述べますが、玉井さんが神戸空襲を記録する会にかかわるようになったのは、空襲体験の継承という問題意識からというよりも、偶然的な要素がおおきかったようです。玉井さんは、40歳のときに、君本昌久さんという人が主宰していた文学塾「市民の学校」に参加します。その君本さんが神戸空襲を記録する会の代表を務めておられたことで、記録する会にもかかわるようになりました。

そういう経緯もあって、玉井さんの空襲についての認識は、たぶん抽象的で観念的なものであったようです。けれども、玉井さんは、さまざまな出会いをとおして観念的な空襲体験を具体的な固有名詞を持った体験へと変化させていきます。詳細は、拙稿を読んでいただければと思いますが、たとえば、神戸空襲の体験者である女性のケロイドをはじめ目にした瞬間や、神戸空襲を記録する会の代表でありながら、自身の空襲体験を語ろうとしなかった君本さんに非難めいた思いをいだいていた玉井さんが、自身が阪神・淡路大震災を経験したことで、語ることでできない体験が存在することに気づくに至った経緯などが語られました。

わたしは、こうした玉井さんの体験を、直接の体験でないという意味で〈〉をもちいて〈体験〉と表現し、それで、玉井さんがどのように空襲を〈体験〉したのか、さらに、玉井さんの空襲〈体験〉を聞いたわ

たしがそれをどのように受け止めようとしたのかを考え、空襲体験とは何か、体験者の話を受け継いでいく、こうした〈体験〉の積み重ねが継承につながっていくのではないかということを書きました。

さて、ここからが本題ですが、わたしが玉井さんについて書いた文章を歴史学の「論文」として読もうとすると、おそらく多くの人にとって違和感が大きく、かつ、不十分な点が目につくのではないかと思います。

違和感のひとつは、いずれの文章も「わたし」が主語として登場すること、わたしの認識の変化や感情が主題のひとつとなっていることだろうと思います。

3. 「わたし」を歴史に叙述することとは？

「わたし」という主語が文章の中に登場することへの違和感は、文献史料にもとづく歴史叙述では研究者であるわたしの認識や、その変化が書かれることはほとんどないという慣習とかかわっています。

2017年に日本近現代史研究者の大門正克さんが『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』（岩波新書）を刊行されました。この本は歴史研究者のみならず、広くオーラル・ヒストリーに関心のある方たちに読まれ、支持されています。これを歴史研究者によって書かれたオーラル・ヒストリー論として読むと、とくに注目されるのは、第5章を「聞き取りを歴史叙述にいかす」として、聞き取りをふまえた歴史叙述の方法をめぐる考察にまるまる1章が当てられていることです。よく読むと、全編をとおして語る・聞く・叙述するという一連の行為の関係性に自覚的であることの重要性が繰り返し説かれ、聞き取りの対面性・身体性をふまえて聞き手の認識も含めた叙述の必要性に言及されていることに気づかされます。『語る歴史、聞く歴史』がいうような聞き取りの性格を考えると、聞き取りをもとにした歴史叙述において聞き手である「わたし」を叙述することは必然ではないかと思えてきます。

わたしが最初に書いたオーラル・ヒストリーは2010年に発表したもので「ある女学生の戦争体験」という文章です³⁹⁾。これは豊田和子さんという神戸空襲の体験者のことを書きました。豊田さんは1945年3月17日の神戸大空襲の体験者のお一人で、インタビューする以前、すでにイベントなどで神戸空襲の体験を語っておられ、自身で著書なども発表されています⁴⁰⁾。それを事前に聞いたり読んだりしてい

39) 人見佐知子「ある女学生の戦争体験」(『歴史と神戸』49巻5号、2010年)。

40) 豊田和子「記憶のなかの神戸——私の育ったまちと戦争」(シーズ・プランニング、2007年)。

たので、わたしは豊田さんの体験を知っているつもりでインタビューに臨みました。

1945年3月17日の夜、豊田さんは焼夷弾がふりそそぐ中を逃げ回ります。火の海の中で服や髪の毛が燃え始めるのを見て「死ぬな」と思ったそうです。そのときに目に入った防火用水に無我夢中で飛び込み、しばらくして意識を失います。「助かったぞ」という声で気づくと夜が明けていて、水槽には一滴の水もなく、目の前には焼け野原がひろがっていたそうです。

インタビューで「もっともつらかった体験」（トラウマ性記憶にかかわる体験をこのように質問することとなっていました）をうかがったとき、わたしは、当然空襲の話がくると思っていました。ところが、豊田さんからは思わぬ答えが返ってきました。じつは、「あんまり空襲、空襲には思わない」んだといいました。それよりもつらかったのは、空襲の10日後におこなわれた高等女学校の卒業式で教師から投げつけられた「顔も見たくない」「あんたのことなんて知らんよ」という言葉なんだと続けました。高等女学校の4年生の時、肋膜炎を患った豊田さんは、学徒労働員に参加することができませんでした。そのことで豊田さんは、卒業式の日、工場から配られた缶詰をもらうことができませんでした。缶詰は、学年主任が卒業生に順に手渡しされたそうですが、豊田さんだけ「ぼんと」飛ばされてしまったそうです。豊田さんは戦争のことで一番思い出すのはこの「非国民扱い」だといい、「その時の先生の顔も忘れられない」と語られました。

このインタビューにわたしは衝撃を受けました。戦争体験とわたしが思っていたことと、じっさいに語られた戦争体験がまったく違っていただけです。「ある女学生の戦争体験」という文章はそのときの衝撃に突き動かされるままに書きました。このときは「書かねばならない」という感じで夢中で書いた記憶があります。文章のベースにあるのは「わたし」の衝撃です。正直にいうと、このとき、叙述の方法など理論的なことはほとんど考えていませんでした。それでも、豊田さんの戦争体験を伝えるためには、「わたし」の存在を抜きにして書くことはできなかったと、いまでも思います。この報告のために読み返してみてもやはりそう思いました。聞き取りで現場に臨んだ経験をもつ人ならば共感していただけるのではないかと思います。聞き取りという方法

に「わたし」を叙述することの必然性があると考えるのはわたしのこの個人的な体験にも根ざしています。

4. 個人の体験から歴史過程を叙述する—玉井さんの体験を歴史に位置づける

聞き取りをもとにした歴史叙述における「わたし」の問題を以上のように理解したうえで、しかし、それでも玉井さんについてのわたしの考察には、物足りなさを感じられることと思います。というのも、玉井さんの体験を時代状況との関わりの中で理解する、歴史過程のなかに位置づけるという歴史学研究として必要な考察が、この文章にはやはり不足していると思うからです。さいごに、玉井さんの内面やライフヒストリーと時代とのかかわりについて、若干の考察をおこなって、報告を終えたいと思います。

玉井さんが神戸空襲を記録する会と関わりをもつようになったのは、先にも述べたように、君本昌久さんが主宰する文学塾「市民の学校」に参加したことがきっかけです。君本さんは、詩人であり評論家であり、「市民同友会」の事務局長を長年つとめられた方です。市民同友会は、戦後まもなく神戸に市民社会の実現をめざして結成された、神戸の知識人や文化人を中心とするグループです⁴¹⁾。1993年に解散しています。

神戸空襲を記録する会が発足したのは、1971年のことです。君本さんが代表をつとめ、事務局は市民同友会の事務所におかれました。1970年代以降、ベトナム戦争などを背景に、市民運動として空襲の聞き取り・記録運動が盛んになります。神戸空襲を記録する会はそのなかでもっとも早い取り組みのうちのひとつです。北海道から沖縄まで、都市を単位に空襲体験者の証言を集めた『日本の空襲』全10巻が三省堂から刊行されたのは、1980年、81年にかけてです。近畿編（6巻、1980年）を担当したのは君本さんです。おなじころ（1981年）、記録する会の働きで神戸市中央図書館に常設の戦災記録資料室が開設されます。

玉井さんが記録する会に関わるようになったのは、神戸における空襲記録運動がひとつのピークをなす、そのような時期（1981年）です。

空襲記録運動についての研究は（東京をのぞけば、じつは）あまり多くありません。長志珠絵さんという近現代史の研究者が、空襲記録運動の成果に対す

41) 市民同友会については、市民同友会『市民同友会三十年史』（1978年）、同『プラス5年史』（1983年）、同『プラス5年史 続』（1988年）、同『プラス5年史 続々』

（蜘蛛出版社、1993年）、大村卓弘「市民同友会と君本昌久」（『歴史と神戸』51巻1号、2012年）などを参照のこと。

るアカデミズムとしての日本史研究の関心の低さを指摘しておられます⁴²⁾。神戸空襲を記録する会については、横山聡子さんの卒業論文をもとにした研究⁴³⁾が注目されるくらいです。また、玉井さんをはじめ、空襲記録運動には女性が多くかかわっています。しかし、これまでの研究では、運動をジェンダーの視点で分析し、女性の経験として意味づけようとする意識が希薄であったことについても指摘があります⁴⁴⁾。

では、玉井さんにとって空襲記録運動はどのような経験だったのでしょうか。玉井さんは、「市民の学校」に参加する前後のことを次のように述べています⁴⁵⁾。

…ひと頃マスコミの話題にのぼったカプセル人間ということば。人間と外部世界との間に透明なバリアがあって、本人は必死であがいているのに、もがけばもがくほど深みにおちていく。
…こんな屈折をかかえたまま成人し、結婚。二児を得、幸せであるはずなのに、なぜか、むなしい。

1980年代、「家庭」内での妻・母役割への不満や焦燥から、「主婦」の社会的活動への参加がすすむといわれます⁴⁶⁾。社会活動への参加の仕方は多様で、市民運動への参加はそのうちのひとつです。空襲体験者ではない玉井さんが記録する会にかかわった背景として、当時の多くの女性が共有していた妻や母という家庭内役割との葛藤といった当時の時代状況を指摘することができそうです。

しかし、わたしは、玉井さんが「カプセル人間」であったことと玉井さんがかかえていた「屈折」は、玉井さんの自身の戦争体験とふかく関わるように思います。この場合の体験は、〈〉のつかない直接の

体験です。

玉井さん自身はあまりそのように認識していない（次に述べるような理由でむしろ認識しなくなかったのではないかとわたしは考えています）のですが、じつは、玉井さんにも直接の戦争体験があります。父親を戦争で亡くしたことです。もともと病弱であった父親は、敗戦間際の1945年8月1日に病死されました。39歳でした。父親の死を直接みていない玉井さんは、長年、父の死に実感をもてなかったといいます。それどころか、父親が戦病死であったことを肩身狭く感じ、「勇敢にたたかって死んでほしかった」とずっと思っていたそうです。玉井さんの「屈折」は、そのことと不可分ではなかったと推察します。玉井さんが父の死を自分の戦争体験としてあまり意識していないことは、父の戦病死を認めたくない気持ちと関係していると思います。

しかしそうした玉井さんの思いは空襲を記録する会の活動にかかわる中で変化していきます。すなわち、父親が勇敢に戦うことはどういう意味なのか、それは誰かの父親を奪うことではないかという気づきがあり、玉井さんは自らの加害性をも省察するようになっていきます。『なぜ戦争体験を継承するのか』では、そのあたりを詳しく書きました。

インタビューにおける聞き手の役割をふまえ（「わたし」をどのように叙述するかという問題です）、玉井さんの個人的な経験の意味を、空襲記録運動や女性の社会参加という時代とのかかわり、大きな歴史に分け入って叙述することをわたしの差し当たった課題として報告を終えたいと思います。ありがとうございました。

蘭 力作が続いていきます。次に福本拓さんをお願いします。

第二部③「聞き取り／インタビューと地域・場所—地理学の事例から」

福本 拓（南山大学）

1. 人文地理学におけるインタビュー

人文地理学を専門にしています。社会学・歴史学

のインタビューの話を聞いていて、地理学でも桜井厚さんの『アクティブ・インタビュー』を踏まえたインタビューを実践している研究者がおりますので、その方たちの名誉のために（傾向としての話を

42) 長志珠絵「『空襲研究』から考える」『日本思想史研究会会報』27号、2010年、のち同『占領期・占領空間と戦争の記憶』有志舎、2013年所収。

43) 横山聡子「記憶を紡ぐ——『神戸空襲を記録する会』の軌跡をたどって」『歴史と神戸』51巻6号、2012年。

44) 長志珠絵「『防空』のジェンダー——戦前戦後における日本の空襲言説の変容と布置」『ジェンダー史学』

11号、2015年。

45) 玉井洋子「原体験から追体験へ——破壊のなかから創造へ」（九条の会、ひがしなだ『シリーズ 私の戦争体験（2）』九条の会、ひがしなだ、2012年）。

46) 松村尚子「生活の現代的特徴と主婦役割」（女性史総合研究会編『日本女性生活史 第5巻現代』東京大学出版会、1990年）。

します)。全体として地理学ではインタビューって、今、お二人がお話されたような意味ではされていません。地理の学会誌でも、ちらちらインタビューでデータを(とったと)書いたものがありますが、今日の話からすると、それはおそらくインタビューではない。「聞き取り」という方がいいのか、「地理学(の方法)に則った一つのファクト、エビデンス、データ収集を行う」という位置づけにすぎないですね。「アンケート調査で聞けないことをインタビューで聞きました」という部分が多い。

地理学においてインタビューの方法論は日本の場合、(他分野から)輸入しているものが大勢です。浮田典良という地理学者が出している学部生向けの調査法教科書⁴⁷⁾があり、聞き取りとはどういうものかと説明されています。「フィールドワークの心構え」では「フィールドワークに出ると、事象を謙虚にみる姿勢を崩してはいけない。…意外性に、素早く適切に対処することが最も重要である」⁴⁸⁾と。聞き取りを含めてフィールドワークをしている時は、「帰納的・問題発見的でなければならない」⁴⁹⁾と明言されています。お二人の話の内容からすると大変対照的だなと改めて感じた次第です。

何も考えずにインタビューという言葉を使ってやることがありました。私は日本の「多文化共生」等々に関する研究、特に長らく在日朝鮮人の集住地区の形成をやってきました。その延長で在日朝鮮人にかかわる人口移動の問題を都市との関係から考察することをやってきたのですが、最初に卒論でやったのは在日朝鮮人ではなく、大阪で当時増えていたニューカマーの外国人で、アンケート調査をやりました。それを補完する目的でインタビュー調査をやりました。あまりうまくいかなかったのですが。論文の趣旨は「集住地区に居住する人と、そうでない人で社会関係にいかなる差があるか」を調査したものです。「友人関係の構成について教えてください」とインタビューと称して聞きました。その論文は苦勞して形になったんですが⁵⁰⁾、そこではインタビューの「発話」として引用しました。ニューカマーの韓国人の方に特に在日朝鮮人との関係をどう思われているか。それは「集住地区に住んでいるから、あるんですよ」といったかったのが、この論文の趣旨

ではあります。発話内容は「一番辛いと思うのは同じ在日朝鮮人に冷たくされる時である。友人には在日である人も、そうでない人も、日本人もいる。なぜそんなに〔筆者が〕我々と在日朝鮮人を分けたがるのか、わからない。ニューカマーと呼ばれることには違和感を覚えることがある」⁵¹⁾という発話を、そのまま引用して、その後のくだりでK14というコード、「滞り期間も長く、さまざまな知り合いと接触していた経験から筆者を含めて彼と在日朝鮮人を区別する根拠が何に基づいているのか疑問視している」⁵²⁾という記述、今だったら「ニューカマーとして差異化される中で生活している。差異化を経験しやすいことが集住地区の特徴である」という言い回しをしたのではないかと思います。この部分は何人かの方に「あそこはよかったね」といっていただいた部分もあります。「ニューカマーと在日の人を分けるのは、在日の人が、そうしているだけではなく、自分もそうしている」ということを、ちょっとですが、自分を引き合いに出して書いたというものです。

ところで「地理学には方法論的な議論がない」といいましたが、唯一、しっかり議論したのは成瀬厚さんらが2007年に書かれた論文です⁵³⁾。その中で、インタビューの方法論に関する議論だけではなく、地理学において言説なるものをいかに分析するか、その中でポスト構造主義的な理論を踏まえて行為者のアイデンティティは自明ではなく、言語を通じて構築されるものであると言われています。言説の分析は、言語が行為者を構築したり、行為者間の関係をつくりだす際に注目するものである、つまり「そこにそう書いてあるから、こうです」という、ある種ナイーブな実証的な態度ではなく、書かれたものの発話されたものをどう扱うかということの問題視されたものです。そして、言語資料に基づく分析が、しばしばアイデンティティの自明性を問い直すのではなく、むしろ強化することに寄与している、と。つまり「新聞に、こう書いてあって、こうだ」というように論述することは、新聞のつくっているカテゴリーをそのまま依拠し、再強化している部分があると批判されています。

地理学における言説分析、インタビューを含めてどうあるべきか。聞き取りの中で発話を所与とする

47) 浮田典良・池田碩・戸所隆・野間晴雄・藤井正『ジオ・パル 21 地理学便利帖』海青社、2001年。

48) 浮田ほか、前掲注1、167頁。

49) 浮田ほか、前掲注1、167頁。

50) 福本拓「大阪府における在日外国人『ニューカマー』の生活空間」、『地理科学』、57巻4号、255-276頁、2002年。

51) 福本、前掲注50、269頁。

52) 福本、前掲注50、270頁。

53) 成瀬厚・杉山和明・香川雄一「日本の地理学における言語資料分析の現状と課題—地理空間における言葉の発散と収束—」、『地理学評論』、80巻10号、567-590頁、2007年。

のではなく、研究者・対象者の微視的な権力を含めて議論していることにこそ意義がある。李先生、人見先生の話ともかかわってきます。しかし（成瀬ほかは）地理学界ではそれがほとんどできていないのではないかと指摘されています。「地理でインタビューをやる意義はどこにあるか」も言及があり、言葉の生産の場にかかわる主体（それは調査自身も含まれますが）、それに注目し、彼らが帰属しようとする調査対象者が、帰属しようとする集団的アイデンティティと、それが拠り所にする地理的イシューとの関係を考察する…発話というものの背景にある、常に発話を通じて構築される過程に、地域や地理的位置がどういうふうにあるかを考察することであるといわれています。

私自身は、地理学のクラシックな部分でやっていて、集計データに対してインタビューはどのくらい集めたらいいのか、インタビューは外すかという議論もあるが、こうした（成瀬ほかの）議論にはついていけなかった。自分の理解力では追いつかなくて、修士課程以降、インタビューという方法からほとんど離れました。直接、誰かにあって話を聞くことはもちろんあります。先だってコリアタウンの店主の方にお話を伺いました。それは自分の中では「聞き取り」です。対話的に何かを互いに構築しようということは、ないわけではないのですが、ファクトがどうであったかを聞くことがメインで、自分の中ではインタビューではないというつもりでやってまいりました。

2. 「記録としての聞き取りインタビュー」について

2002年の論文以降で唯一、「インタビュー」という言葉を使った論文があります。2013年の論文⁵⁴⁾。2008年頃に「合田文書」の保存をめぐる取り組みがありました。「合田文書」というのは、東大阪市で社会運動を在日外国人支援に止まらず、消費者権利、プライバシーをめぐる問題やゴミ問題と、多様な市民活動にかかわってきた合田悟さん、牧師の方ですが、大変几帳面な方で会議録と配付された資料を日付順にテーマ別に並べてあるファイルが700冊くらいある。亡くなられて所属していた教会から処分を迫られ、いっしょに活動していた方が一旦、預かっておられた。合田さんは東大阪市で在日朝鮮人の密航者の支援運動もされていた方で、その相談ファイル、極めて取扱いが難しいものも含まれる。これを

どう保存しようかと、大阪大学の杉原達先生と二人で訪ねたのが最初です。あれこれ保存の仕方を「こういう仕方では整理しましょうか」という中で、費用面の難しさがあった。手弁当でやるには限界がある。その折りに過去、合田悟さんとつながりのあった韓国の研究者が「韓国の国家記録院に移管してはどうか」という話を持ちかけてきました。ただし膨大な資料を移管する際、オリジナル全部をもっていく。オリジナルこそが資料保存の価値がある。地域には何も起こらなくなる。アクセス権だけが残るということで当惑されていた。自分たちでどうしようもない。その最中、2013年の論文の中で「この過程をちゃんと記録しよう」ということをやりました。その際にかかわった人たちも、私という外部の人間に対して「ぜひ聞いてほしい」というスタンスでこられたんです。結果、10人の方にインタビューさせていただきました。それを「インタビュー」と呼んでいいかどうかは問題ですが。その論文では「インタビュー」という表記で書きました。具体的には「移管されるのはやむをえないが、その意義がどこにあるか」について書きました。自分の役割はあくまで運動の外部者であり、期待に応じて記録する。インタビューで聞いた内容がどういう意味をもっているかを考えて提示する。それは結果として発表するというよりは、調査対象者の方とのコミュニケーションの中で、一旦記録するものとしてできあがったものです。去年、2013年から10年近くたった後、「合田牧師の草の根40年、合田牧師を偲ぶ会」という、没後10年を記念して集まる機会がありました。韓国への移管はいろいろ問題があり、駄目になったのですが。それが保管されている場所に関係者が集まり、話をされた中で、事前に何も聞いていなかったんですが、「ここにその経緯が書かれています」と自分の論文の説明をいただいて、僕もうれしいなど、「あの時、やったことに意味があった」と思いました。記録としてインタビューをやった。それは地理学と関係があるかという点と難しいのですが、その後も関係者の方に引き続きお話を聞いています。

3. 「グローバルな対抗空間の形成」について

1970年代後半、全金枚岡闘争（という運動）がありまして、労働運動ですが、興味深い部分があり、コストが高いので大阪の工場を閉めて韓国の馬山にある自由貿易地域に工場を移す。そして工場が閉鎖

54) 福本拓「市民運動データベース化の意義と課題—東大阪市・『合田文書』の韓国への移管を事例に—」『世

界人権問題研究センター研究紀要』、18号、199-220頁、2013年。

されることに對して地元の労働者は反対する。移転先ではどうなったか。当時、ものすごく国家主義的な経営の中で労働者への抑圧がある。ストライキを絶対させない。自由貿易地域は韓国の国外⁵⁵⁾にある。労働力の搾取、特に女性の労働力の搾取が行われた。大阪の工場が閉鎖されるかもしれないと闘争していた人たちが、韓国の問題に関心をもち、結びつく。ローカルなところからグローバルな展開がありました。今、調査を進行中ですが、地理学という観点だからこそ聞けると思う部分もあります。新自由主義的な、当時からすでに安い地域でものをつくるといふグローバルな生産体制の変遷があった。「資本主義的な空間編成」と地理学では呼びますが、それに対する人々の対抗が、国境を超えて成立していたわけです。

最近、大阪の場合、新自由主義的な都市経営が跋扈している。マイノリティへの抑圧が顕著です。そういう時代だからこそ今、聞いておく意味は大きいといわれています。その関連で原口剛というホームレス研究者、釜ヶ崎の日雇い労働者の研究者の指摘で、今、日雇い労働のクラシックなスタイルがどんどん少なくなり、むしろオンコールワーカー、ケータイでその都度、呼ばれる労働者の社会がある。そうした不安定就労者が、なかなか団結することができない状況に對して、原口さんは、釜ヶ崎という土地にある労働者の「アスファルトに埋もれた声を、アスファルトを引き剥がして聞く」という表現をされています⁵⁶⁾。そうした声が、研究者を含めて、アスファルトの下に地霊たちの蠢きを察知する土地勘をもってそれを聞くことが、今の不安定就労の問題に對してカウンターになるんだと書かれています⁵⁷⁾。

今の支配的な空間、「マスター・ナラティブ」という言葉があるとすれば「マスター・空間編成」に對するオルタナティブを提示することに、自分は記録者として関与できるのではないかと、さしあたり考えているところです。インタビューという場面を通じて自己が変容するということをどういうふうに実証研究に組み込めていくかを、2002年の論文で振り返ると、そこしか成功していない。成功といっていいかわかりませんが、難しい課題だなと思っています。

第三部 総合討論「可能性としてのインタビュー」

伊吹 唯（熊本保健科学大学）

伊吹 私はこの3月まで上智大学グローバル・スタ

今、書いている論文で「在日朝鮮人」という用語の初出の部分に注をつけました。「植民地下の朝鮮半島からの移住者とその子孫を指す際には在日韓国・朝鮮人、在日朝鮮人、在日韓（国）人、在日コリアンなど複数の呼称が用いられてきた。筆者は彼ら彼女らの歴史について第二次世界大戦の連続性を重視する立場から原則として在日朝鮮人の呼称を用いる。それぞれの用語は用いられる文脈や政治的対立と不可分のものであるが、研究者が自由に選べられる性質のものでないことは付記しておきたい」⁵⁸⁾。これを初めて入れました。コリアタウンで話を聞く中で「自分は在日韓国人だ。朝鮮といわれるのがいやだ。ここは韓国である」とおっしゃる方もある。そこに「在日朝鮮人の歴史が反映された町」と論文で書いたりするわけですが、そのように名指す行為は地元の多様な意見と対立することが往々にしている。研究者がそういうプロセスから自由でいられるわけではないことを、今さら気づいたのかといわれるかもしれませんが、直接ではないにせよ、インタビューしていく中で自己変容が反映されていく部分があるのではないかと。地理学的方法としても反映される部分があるのではないかと。ということです。私からの報告は以上です。ありがとうございました。

蘭 ありがとうございました。昨日、一昨日と日韓歴史家会議に出ていました。そこで林志弦（イム・ジヒョン）さんから「どう表現するのか。在日朝鮮人と言うのか、在日韓国人と言うのか、在日コリアンと言うのか、どう歴史的に叙述するのか、歴史家にとってはとても問われることである。どういう言葉を使うのか、これが対象と自分との歴史の叙述の仕方にとって欠かせない問題ではないか」といわれました。まさに福本さんが同じことを報告されて感動しました。ありがとうございました。

以上で最初の導入、3人の方からの報告を終わります。一旦、第二部を終わります。これから伊吹唯さんから報告についての一問一答とコメントをお願いしています。それを踏まえて報告者とフロアを交えて議論へと突入していきたいと思います。

ディーズ研究科国際関係論専攻に所属し、蘭先生

55) 正確には、国内法の外にあるという意味。ある種の例外空間（ジョルジュ・アガンベン）だったといえる。

56) 原口剛『叫びの都市—寄せ場、釜ヶ崎、流動的下

層労働者』洛北出版、2016年。

57) 前掲注56、374頁。

にご指導をいただきながら、日本にいる移民の方たちのライフストーリーの研究をしていました。なぜ一番の若手がコメンテーターをするのか不思議に思っていたら、しゃる方もいると思いますが、今日は学部生や大学院生などインタビューを始めたばかりのひとと、報告をいただいた先生方の間をつなぐ形で質問をしてほしいということでこのお話をいただいたと理解していますので、そのような方向でコメントと質問をさせていただきます。

まず、蘭先生へのご質問です。今日の先生のお話は、1つはインタビューの始め方やどういう解釈をするかという方法論についてでした。その一方で、インタビューには「レシピ」や「ノウハウ」があるわけではないというお話もありました。方法論がある一方で、必ずしもそれがすべてになるわけではないとのことでしたが、そこがまさにインタビューの面白いところなのだろうなと思って、お話をお伺いいたしました。また、先生のインタビューの失敗、成功それぞれのご経験、特に失敗のご経験は聞いたことがないお話だったので興味深く伺いました。インタビューの場での出会い方次第でインタビューがどう転ぶかわからず、研究者人生そのものにも影響するということはインタビューの面白さと難しさが凝縮されたお話だったと感じました。

そのお話のなかで「語りの社会性」を読み込むという点について、もう少しお伺いしたいと思いました。今年度（2020年度）後期の先生の授業で、若手のゲストスピーカーが自身のファミリー・ヒストリーについてお話をされ、そのなかに社会性を読み込んでいくことが上手だったとお話されていました。かれらがそれを上手くできていたのはなぜなのでしょう。先生からご覧になって、どう見えているかをお聞きしたいと思いました。これから自分たちがインタビューをしていくなかで、社会性を語りのなかに読み取っていくことのヒントになるものがあるのかなと思い、ぜひ伺ってみたいと考えました。

続いて、李先生へのご質問です。ご自身の経験を描きつつ、語り手の生を描く目的からも離れないインタビューの叙述の方法の模索のお話だったと思います。桜井先生の「対話的構築主義」を使った研究に対して、聞き手の発話を書けばいいとか、

聞き手の構えに言及すればいいと考えているような作品があるという批判もある⁵⁹⁾わけですが、それに対して「共同性の記述」というお話は「対話としてのインタビュー」をどうやって実践し、記述していけばいいかを具体的に提示してくださったと理解しました。最後に、今のところは、これからはあまり対話としてのインタビューという描き方は積極的にはとり入れていかない、むしろ素朴で実証主義的なインタビューの使い方をしていくとお話されていたと思います。今日のワークショップ全体を通じて聞き手、調査者の位置づけについてのお話が多かったと思いますが、インタビューの社会的な文脈についても蘭先生からお話がありました。そこで、李先生が「素朴実証主義的にインタビューを使う」といわれる時の「語りのコンテクスト」について、どうお考えかを伺いたいと思います。ご自身の経験はあまり積極的にとり入れていかないということですが、「素朴実証主義的」といわれる時の「語りの構築性」、つまり、自分（聞き手／研究者）の経験以外の部分からの構築性を、どうとらえられているかを伺いたいと思います。

ところで、最初にお伝えしておくべきでしたが、私の研究の専門は社会学で、歴史学と地理学へのお二人への先生方へはあまり良い質問ができないかもしれませんが、ご容赦ください。

人見先生へのご質問です。「戦争体験の継承は体験の積み重ねである」というお話は、とても腑に落ちるお話でした。聞き取りの体験や「対話性」を描く方法については、抽象的な話になりがちなのが多いように思うのですが、人見先生のお話では、自分のインタビュー体験のなかの何を描いていくかということが具体的で、とてもわかりやすくお示しいただいたと思います。そのような体験の積み重ねを描かないといけない時、「わたし」の認識を含めて描くということが歴史学においても必要である一方で、それは歴史学の慣習の面から難しいところもあるとのことでした。個人の体験と歴史叙述のバランスをどうとるのかという点に難しさがあることが、よくわかりました。お伺いしたいのは、歴史学と他の分野における「わたし」の叙述についてです。今日のお話は、聞き手側の体験、インタビューのなかでの認識の変化を

58) 福本拓「韓流ブーム下での大阪・生野コリアタウンの変容—エスニック・タウンの価値と地域活性化—」、『地理空間』、13巻3号、印刷中。

59) 石川良子・西倉実季、2015、「ライフストーリー研

究に何ができるか」桜井厚・石川良子編著『ライフストーリー研究に何ができるか—対話的構築主義の批判的継承』新曜社、1-20。

どう描くかというものだったと思います。では、歴史学から見て「わたし」を描いていくことはどのように見えているのでしょうか。具体的には、他の分野（例えば社会学）で行われている「わたし」の叙述を歴史学にどのように応用できるのかや、歴史学からの知見、歴史学から見た時に他の分野で行われている「わたし」の叙述はどうブラッシュアップできるかという点についてです。他の分野とどのような接合可能性があるのかを伺えればと思います。

最後に、福本先生へのご質問です。地理学における実証的な研究とインタビューの乖離、インタビューを地理学のなかでどう生かしていくか、先生ご自身も試行錯誤されていることが理解できるお話でした。これまで地理学でのインタビューの使い方は勉強したことがなく、大変勉強になりました。インタビューをどう生かしていくかの可能性の1つとして「記録としてのインタビュー」というお話があったのかなと思いました。蘭先生のお話の最後でも言及されていましたが、「アーカイブ化」のお話ともつながるのかなと感じながら伺いました。もう1つの可能性としてより地理学ならではの「空間」のお話があったと思います。これまでもライフストーリーの方法論のなかでは「語りの社会的空間」⁶⁰⁾という議論や、蘭先生の「語りの磁場」⁶¹⁾の議論が蓄積されてきましたが、それとも必ずしも全部が一致するわけではない概念のように思いました。この「空間」という概念との掛け合わせのなかに、地理学ならではのインタビューの使い方の面白さがあるように思いました。これからどんなふうに議論が進むのか、大変興味深いお話でした。

伺いたいのは、地理学におけるライフストーリーの位置づけの変化についてです。福本先生は、ご自身のご研究のなかで、最初の頃はインタビューをされていたけれども、次第に距離をとるようになった時代があったとおっしゃられていました。その頃から比べて、今の地理学のなかでのオーラルヒストリーやライフストーリーの位置づけが、どう変化しているかを伺いたいと思いました。今回、この機会に少し勉強させていただいて、

地理学のなかでもライフストーリーを使って論文を書かれている方⁶²⁾もいらっしゃるように見受けられ、近年、地理学のなかでオーラルヒストリーやライフストーリーへの位置づけに変化があるのであれば伺いたいと思っています。

質問は以上です。ありがとうございました。

蘭 私に対する質問、「語りの社会性」に関してお答えします。従来この授業では、私くらいの年配の人を招待して人生を語ってもらいます。というのも、歳を重ねると語り自体が重厚になるからです。しかし、今年はコロナ禍の状況ですので、Zoomにアクセスできる人ということで若手になりました。もっとも、去年も同様の企画をしましたが、一橋大学の山崎さんは大学院生の方でしたが、たまたま年配者の中で彼だけが若手だったのですが、去年もすばらしい講演をしてくれ、学生の心に響きました。そこで、今年は思い切って若手の大学院生の方々にお願いしました。そして、事前に「どんな話をしてほしいか」を頼みました。自分がこれまで生きてきた中で、カテゴリーが前面に出てくる可能性があります、「自分が在日コリアンである、中国帰国者の三世であるとか、台湾出身のニューカマーであることが自分の人生において、自分が生きていく中で、どんな影響をもち、かつそのことが今、どうかかわっているかを話してほしい」と。自分のファミリー・ヒストリーだけを話すということではなく、年配の方は、それができるのですが、みなさんは若手の研究者なので「自分の研究との絡みで話してほしい」といいました。たぶん、彼らの話がとても学生に響いたのも、この私の注文が一つのポイントだったと思います。「聞き手」の重要性でしょうか。

さて、2006年、李洪章さんと出会った時、彼はもともと理系の学部にあたりましたが、受験の前に相談にきて、「こういうことを研究したいけど可能か」という質問で、その点でやりとりがありました。彼の話を知ると、彼は、社会学は素人だったんですが、その話には、在日コリアンとして生きてきたことで、すでにその話には社会性が組み込まれていました。彼は、典型的に自分を突き放しながら話をする人ですが、(社会的側面

60) 桜井厚、2002、『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房；桜井厚、2010、『ライフストーリーの時間と空間』『社会学評論』60巻4号、481-99。

61) 蘭信三、2007、「中国「残留」日本人の記憶の語り—語りの変化と『語りの磁場』をめぐる」山本有造編著『満洲—記憶と歴史』京都大学学術出版会、212-51。

62) 久島桃代、2019、「農山村女性移住者と自然との関わりにみるライフストーリー—福島県昭和村における『織姫』と『からむし』との関わりから」『日本オーラル・ヒストリー研究』15号、109-24；関村オリエ、2018、『都市郊外のジェンダー地理学—空間の変容と住民の地域「参加」』古今書院。

と個人的側面の構成が)極めてバランスがうまくできていた。李さん同様に、今回の3人の人たちもバランスがとれていて、在日コリアン三・五世の彼女も自分を突き放して淡々と話しました。ただ、あとの二人は自分と対象が、ある種、渾然一体となる形で話をしていて、語りの客体なのか主体なのか、わかりにくいくらい、複雑に入り込んでいく。しかしながら、なおかつ、一線も保っている。李さんの報告の中で「当事者の難しさ」を感じつつも、そこをどう対象化していくかという話がありましたが、かれらにもそれは共通している。自分の悩みと対象者の悩みが共鳴しあいながら、自分を保って話していく。研究者としての自分をどう位置づけるかを話してくれることによって、そこには「語りのもつ社会性」が、彼らの存在である「社会性」が、ほんとうに見事に出てきて、私は毎回、涙を流しながら聴いていました。彼らは「語りの社会性」だけでなく、それを自分の中で抑制しつつ、コントロールし、対象化しつつ話すという彼らの営みに感動しました。彼らの生きてきた人生と研究との断続的な会話が、その報告のなかに滲む「語りの社会性」を培っていること、それがもっと重要なポイントでしょうか、そう思います。伊吹さん、素晴らしい質問をありがとうございました。

李 報告の最後に「今後また再び論文の中に私を登場させざるをえない機会がくるだろう」と述べましたが、一つ想定していることがあり、在日朝鮮人2世をどうとらえていくか、私の中で難しい問題で、近年、一部の在日朝鮮人2世たちが、しばしば「民族や国家は虚構だ」というわけです。そういう主張を「素朴実証主義」的にそのまま受け止めて「民族や国家は虚構です」というわけにはいかず、こういう語りがいかに生み出されてきたのかについて理解していかないといけないわけです。こういう語りは、そもそも2世の人たちが、1世と3世の狭間で「民族本質主義に対する違和感」を経験してきて、さらに近年、2000年代以降の「民族の脱構築論」の議論と出会うことによって違和感を言語化しているのかなと。そういうコンテクストを踏まえて「民族や国家は虚構だ」という語りを理解することになる。私は「脱構築論」を標榜しながらも、本質主義的な民族観であったとしても、それを頭ごなしに否定するのではなく、それすらも理解の対象にしていけないといけないというスタンスで研究をしていますので、その意味では、調査者としての「私」とかわからない「社会的なコンテクスト」も、「私と調査対象者の相

互行為」というコンテクストも、両方踏まえて今後、考察する機会が、きっとくるだろうなと思っています。以上です。

人見 私が歴史学のオーラル・ヒストリーを代表しているわけではないことを最初にお断りしておきたいと思います。ただ歴史学の中でオーラル・ヒストリーは大門さんの本も出てずいぶん進んでいるという印象をもたれるかもしれませんが、歴史学におけるオーラル・ヒストリーは、まだ一分野で、こういう議論が全面的に共有されるほどにはなっていない。社会学でオーラル・ヒストリー研究会の場が設けられることに比べると、まだ成熟していないことがあります。その上で今日は「聞き取り」という実践に即して「歴史叙述はどうあるべきか」を考えましたが、この問題は「聞き取り」だけに止まらないのではないかと考えています。文献史料や文字史料にもとづく歴史叙述においても「わたし」という問題は考えざるをえない。歴史研究者が史料と向きあう時も、史料の語る声に耳を澄ましながら叙述に至る過程で史料との応答を繰り返しながら認識を更新していく過程があり、歴史研究者はそういう体験をしていると思います。そういうことを叙述に含めるかどうか議論をする場があれば、と思います。他方で、歴史学は「時代像」を明らかにするという大きな目的があり、李先生がいわれる「改めて実証主義的な観点から何が語られたのか」に注目が集まっているという報告を聞いたことは勉強になりました。どのように語られたか、主体に寄り添いすぎず、主体との関係性を対象化することが、どこまでできるか。主体の内的条件とともに外的条件、主体と構造のバランスが大事だと思います。個人の体験に寄り添いながら、どのように時代像を描くことができるのかを、これから考えていきたいと思っています。以上です。

福本 ライフヒストリーをやっているわけではないので、もっと(回答に)適切な方がいらっしゃるかと思います。 「空間」についていうと「語る社会的空間」「語る磁場」といわれる「場所」「空間」と、私が使っているのはちょっと意味が違いかと。オーバーラップする部分もちろんありますが、比喩としての「空間」ではなく、もっと具体的な「空間」「場」、地球表面上に具体的に存在する場、固有性をもった場所、資本主義の経済システムが世界をつくり変えた結果、できてくる「空間」というものを念頭においています。その上で「対話的構築主義」を地理学の論文で初めて使われたのは2019年⁶³⁾だと思いますが、それがいい

かに遅かったのかということが地理学において一つ現れていると思います。そういうところを、どこまで意識してきたのか、もちろん「ライフヒストリー」や「オーラルヒストリー」という言葉自体は過去に散見される部分ではありますが、久鳥さんの論文でも、場所感覚とか言語化されない身体感覚を対話的構築主義によっていかに記述するかという、まさに地理学がいう「場所」や「空間」と「人間の感覚」との関係を語りから「語りじゃない部分をいかに引き出すか」、それ一つの方向性として出されているのではないかと思います。私よりもはるかにきちんと既存の議論を参照されてやっておられると思います。

成瀬ほかの引用でもいいましたが、インタビューの、どの側面に注目するかというところで歴史学・社会学とは少し違いがあるのではないかな。地理学は後発の分野ではありますが、インタビューに関して。ただ地理学の場合、フィールドワークの中で、(たとえば)漁業労働者が言語化しえない技術・経験をいかに対話の中で聞か、そういうフィールドワークの経験の議論⁶³⁾がベースにあった上に(他分野からの)輸入によってインタビュー研究が積み重なり、その他の地理学の観点に入ることで、また歴史学・社会学にフィードバックしていけるような研究が、今後できるかもしれないなと感じています。以上です。

蘭 ありがとうございます。では質問はきていますか。

福本 6つくらいいただいています。一つ、蘭先生にきている質問。「上智大学の倫理委員会は申請者名のみならず、申請課題名までウェブで公開されるなど厳しい面がありますが、非構造化インタビューの場合、細かい質問項目を提出させられた場合、どう対処すればいいですか？」。

蘭 私はインタビューをいろんなところでやっていますが、倫理調査委員会との関係はうまく処理できておらず、この件はちょっと難しい質問ですので、お答えは調べてから回答させていただきます。申し訳ありません。

李 つぎに私への質問がひとつあります。韓国人男性と国際結婚し、日韓ダブルの子どもを韓国で育てている在韓日本人女性の研究を行っている方からのコメントと質問です。この方、ご自身も韓国人男性と結婚して韓国で生活して「ダブル」の

子どもを育てているとのこと。在韓日本人女性が韓国に植民地支配を行った日本人とのかかわりという意味では被害者の側面があり、移民女性という立場では差別を受ける立場にある。子どもが韓国で歴史教育を受ける際の立ち位置、日韓で問題が起これば、韓国側と日本側の親族の狭間に立たされるなど重層的であると分析をされている。そういう分析方法に対して、ちょっと考えれば誰でも想像できるもので大仰な分析をしてまで述べる発見とはいえないといわれたそうですが、そういう意見が出るのは、ご自身が語りに対して「カテゴリー化への暴力」を行っているからではないかと悩んでいらっしゃるということです。そのうえで、質問としては、「分析の段階で自身のカテゴリー化の暴力に対してどういうふうに気づいていけばいいのか、意見をもらえれば」とのことです。

この質問を見て最初に思い浮かべた言葉がありまして、修士の時、京都大学の倉石一郎先生が「トランスクリプトは数年寝かせると理解できるようになる」とおっしゃったんですね。それをいわれた時はよくわからず、修論を書かなければならないのに悠長なことをいってられないなとも思って、深くは考えていなかったのですが、今思い返すと大事なことだと思います。私は「ダブル」研究だけをやってきたわけではなく、単著では他にFiM トランスジェンダーの在日朝鮮人青年が、在日朝鮮人社会の家父長主義的な風潮を嫌って韓国に逃避するという語りとか、在日男性と国際結婚した日本人女性が、「ダブル」である子どもに民族的な生き方をさせたいという夫の方針に違和感を抱きながらも、家父長主義的な風潮のもとで自分の意見をいづらないかで、家庭内での対話を目指す姿を調査をしながら見てきました。一言でいうとそうした事例を通して、インターセクショナリティ(差別の交差性)への気づきがあり、それが「ダブル」研究にも生かされて、「加害」と「被害」の二元論をいかに乗り越えるかについて考える際に役に立ったということがありました。院生の方ということなので、とりあえずはがむしゃらに書いてみて、その後、他の事例にもあたってみたり、日本の在日朝鮮人と日本人の「ダブル」研究を参照してみたりして、これまでとは違う角度から自分の事例と向き合うための視点を獲得していくしかないのではないかと思います。また、この方の

63) 久鳥桃代「農山村に移住する女性たちの経験と場所感覚—福島県昭和村『織姫』を事例として—」、『地理学評論』、92巻4号、224-240頁。

64) 松本博之「フィールドワークの射程—オーストラリア・トレス海峡諸島民の地理的想像力—」、『人文地理』、64巻1号、76-82頁。

研究も、他の研究者にとっては大きな気づきを与えるものになるはず。「誰でも想像できるものばかりだ」といわれたとありますが、そんなはずはありません。当事者に聞かなければ分からないことがかならずあるからです。ぜひ機会があれば読ませていただきたいと思います。

李 つぎは人見さんへの質問で、「レジュメの中で引用を除いては「経験」ではなく「体験」という表記で統一されていました。それぞれの言葉の解釈について伺えれば幸いです」とのことです。いかがですか？

人見 私は意識的に「体験」を使っています。より直接的な生々しい「体験」のことを体験とよんでいます。「経験」は経験則という言葉がありますが、「体験」が知識に展開していくことで「経験」になると考えていて、「体験」と「経験」を意識的に使い分けています。成田龍一さんが『戦争経験の戦後史』の中で「戦争経験」と呼んでいることについて、書評で批判的に検討したことがあります⁶⁵⁾。

李 もう一つは全員への質問です。「聞き取りの記録、音声や映像を記録したメディアを未来のために保存し、いつか誰かが聞く、見ることができることを望みますか？」という質問。「今は、そのようなことを考えたくない、考えられないと思うのであれば、40年後、50年後に研究が一段落した時、公開してもいいという考えはおもちゃでしょうか？」という質問です。

福本 先程の「インタビューのアーカイブ化」の質問に対して。私が聞き取りをやっている時は、一切、録音していません。ファクトとして記録するというので聞き取った結果を別途、フィールドノートを文字起こしして保存しているので論文の中で入れ込んでいくと考えています。今は「2013年の論文でやったことを残しておいた方がいいのかな」と思っていますが。私は録音が好きではない。基本的には手書きでやっていて、ちょっと悩ましいところではあります。

李 「公開したいな」と思っています。今、在日韓国人留学生政治犯の記録を読んでいまして、韓国の国史編纂委員会が蓄積している資料があり、それを参照しています。そこでいかに「語り」が語られているか、コンテキストの部分を再解釈する方向で読み直していまして、検証可能性を担保するためにも公開されて後にまた誰か私以外の人が

私が聞き取ったものを参照することはいいいのではないかと思うので「公開してもいい」と思っています。

蘭 李さんはJOHA論文で安岡さんが書いた論文「オーラルヒストリーを受け継ぐために」に関しては読まれていますか？2018年のものを。私が企画して「オーラルヒストリーのアーカイブ化」を早稲田の森本先生と一橋の小林先生と阪大の安岡先生に出てもらって宮崎さんにも、4人で話をして。聞き取ったものを公開する際には許諾をもらっておかないといけない。倫理委員会の問題よりも重要でしょうか。李さんが私にインタビューした時はその論文のために使うだけではなく、「将来的には公開することも考えていますが、オーケーですか。30年後原則、5年後原則でいいでしょうか？」と許諾をもらっておかないといけない。ところが通常、インタビューする時、そこまで安定的な関係で「いいですか？」とサインしてもらうのに気が引けるし、話をしてもらえただけでもありがたいのに、「公開します」というと「あんただから話をするのであって公開となると、ちょっとね」と公開に対してハードルが高い。李さんはインタビューする際にはそこまで許諾をもらっているのか、著作権の問題でいいのか、今、インタビューする時、サインをしてもらっていますか？

李 そこまではしてないです。公開したいかどうかでいうと公開したい気持ちはありますが、そうしたハードルは確かにあるなと思っていました。

蘭 私自身は徹底してインタビューして論文を書いていく時も、インタビューを極めて効果的に活用している研究者ではないのですが。李さんのようには上手に使えていない。その時に社会的フォーマット、アーカイブ化するにあたっての手続きを共有して、倫理委員会の調査は半分、疑問に思うこともあります。李さんのインタビューをした時、もしアーカイブ化するとすれば、保管することができるかも含めて半永久的に。デジタル化すれば、ある組織をつくらればできるのではないかな。たとえば、ブリティッシュ・ライブラリーにいれば、P. トンプトンが「ライフストーリーのアーカイブ化」をしているし、アメリカのコロンビア大学もやっています。それ以外のところでも。アメリカの日系団体でも「DENSHO 伝承」でアーカイブ化している。日本でも医療関係のディベックス・ジャパン (DIPEX Japan) で「健康と病い」に

65) 人見佐知子「書評 成田龍一著『戦争経験の戦後史——語られた体験／証言／記憶』」(甲南大学人間科

学研究所『心の危機と臨床の知』13号、2012年)。

関する語りをアーカイブしているとか。公的などころがやるか、やらないかは一つの問題かなど。李さん、韓国ではどうされていますか？

李 日本と比べると韓国は体系化されていて、私を利用にしている国史編纂委員会の口述資料もそうです。ただ、公的機関によるアーカイブ化には、事業をめぐるポリティクスのあり方もかかわってきますので注意しないといけないと思いますが。公的機関によるアーカイブ化は、韓国では、かなりされていると思います。

蘭 そのあたりが一つの私の報告の中でも次の課題としてあります。同世代の先輩の人たちから「テープが家に100本ある。どうしたらいいかわからない。自分が亡くなったら捨てるしかない、それはもったいない」と。そういうものが次の課題として待っていて、この問題はじっくり考えていかないといけない、次の重要な課題の一つだと思っています。

質問に関してはすべて答えたことになっていますか？

李 後は事実関係の質問なので。

蘭 ではワークショップに関して登壇者の側のフロアからの質問も受けてのやりとりは、一旦、終わらせていただきます。最後に専攻を代表して鈴木先生からご挨拶をお願いします。

鈴木 上智大学で国際政治経済学を担当している鈴木一敏です。本日はたくさんの方に参加していただき、盛会となりました。ご登壇いただいた李洪章先生、人見佐知子先生、福本拓先生、伊吹唯先生、全体の計画を構成くださった蘭信三先生、そして参加くださった皆様、一人ひとりに深くお礼を申し上げます。この会はもともと蘭先生に「卓越したインタビュー技術を広く共有していただきたい」というアイディアが専攻長の渡辺先生にありまして、その要望から始まりました。私自身、国際政治学者としてインタビュー、聞き取りは身近ではあります。官僚の方々や利益集団の方々にインタビューを行っています。しかし具体的なやり方について教わったりすることはありませんでした。大人数で聞き取りに行くこともできないですし、オーラルヒストリーも私が院生の頃は今ほど注目されておらず、実際に他の人がどうやっているかを知らずに試行錯誤しながらやってきました。指導教官がどうやってインタビューしていたのかということすら知らなかった。学んでいく中での我々の分野での手抜きがあったと痛感しています。

インタビューのもう一つの難しさは、それをど

う論文に生かしていくかという点です。今回のように、きちんと突き詰めて考えておくべき問題だと思います。我々の分野では統計学、事例研究については激しい論争があり、それ以降、方法論については意識されるようになってきましたが、インタビューの妥当性、活用の仕方については議論が相対的に手薄だったと思います。不足している部分、補える部分は分野によって違いがあると思いますが、今回、これらの共通するコアになる部分、重要だけど、伝えにくい点を、みなさまに明示的に扱っていただき、しかもアップデートしていただいた。これからさまざまな学問分野の発展に寄与するとともに、今回参加してくださった、これから研究者をめざすみなさんにも役立つのではないかと強く感じています。

今回のワークショップの内容は本専攻の紀要である『コスモポリス』15号に掲載する予定です。3月下旬に出版されることになっています。今後、ご指導の学生にご紹介する機会があれば、ご利用いただければ幸いです。それでは本日は、どうもありがとうございました。

蘭 鈴木先生、ありがとうございました。最後まで残っていただいた70の方にありがとうございました。この中に旧知の方々もいらしてくださいました。私は4月から関西に戻ります。みなさん、よろしくお願いします。ありがとうございました。